

総社市埋蔵文化財調査年報 21

(平成 22 年度)

2012年3月

岡山県総社市教育委員会

序

総社市は、広く肥沃な平野と豊かな水、そして災害の少ない気候風土という農耕に適した条件に恵まれており、水稲耕作開始期以降人々が集住し栄えてまいりました。

その証左として、国指定史跡作山古墳・鬼城山をはじめ、有数の遺跡が数多く存在しています。悠久の時を越え現代に残された遺跡は、私たちにとってかけがえのない財産であり、保護・保存して後世に伝えるとともに、活用を図っていくことが肝要と思います。

総社市では、史跡の保護・活用の一環として、鬼城山の整備に取り組んでまいりましたが、平成22年度で1期10年の主要な整備を終えることができました。その完成記念として、整備の御指導を賜った整備委員会の委員の方々を中心にシンポジウムを開催し、これまでの成果を公表してまいりました。

今後は、鬼城山の活用を通して、より多くの方が他の史跡にも興味を抱き、文化財に対する理解が深まるよう努めてまいりたいと考えております

最後になりましたが、平素から本市の文化財行政に、格別の御指導・御協力を賜っております関係諸機関及び関係者の皆様に深く感謝申し上げますとともに、より一層の御指導・御支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成24年3月

総社市教育委員会

教育長 乗田交三

例 言

1. 本書は、総社市教育委員会が、2010（平成22）年度に実施した埋蔵文化財発掘調査及び立会・試掘・確認調査について、その概要をまとめたものである。
2. 本書は、調査の担当者である谷山雅彦、平井典子、武田恭彰、前角和夫、高橋進一、松尾洋平（現：税務課）が執筆し、それを編集したものである。それぞれ文末に執筆署名を記し文責とする。全体の編集は平井が行なった。
3. 遺物整理にあたっては、田中富子、犬飼真弓（総社市埋蔵文化財学習の館）の協力を得た。
4. 本書の高度値は海拔高であり、遺構実測図の方位は国土座標の入っているもの以外は磁北である。
5. 本書に関する実測図、写真、遺物等は、総社市埋蔵文化財学習の館（総社市南溝手265-3）で保管している。
6. 本書の刊行にあたり、ご教示、ご指摘を賜った関係諸機関及び関係者の皆様には厚くお礼申し上げます。



総社市位置図

目 次

序 文

例 言

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2010（平成22）年度埋蔵文化財行政の概要	1
------------------------	---

2. 立会・試掘・確認調査の概要

無線基地局建設に伴う試掘調査	9
分譲住宅宅地造成に伴う立会調査	10
土砂採取事業に伴う確認調査（狩谷遺跡）	11
昭和中学校耐震工事に伴う立会調査	13
集合住宅建設に伴う立会調査（諸上遺跡）	14
個人住宅建設に伴う立会調査	15
分譲住宅宅地造成に伴う立会調査	16
個人住宅宅地造成に伴う試掘調査	17
個人住宅宅地造成に伴う立会調査	18
個人住宅建設に伴う立会調査	19
集合住宅建設に伴う確認調査	20
個人住宅建設に伴う立会調査（南満手遺跡）	22
集合住宅建設に伴う確認調査（真壁遺跡）	23
特別養護老人ホーム建設に伴う試掘調査	24
個人住宅建設に伴う立会調査（窪木遺跡）	25

3. 発掘調査の概要

市道（南満手3024号線）改良工事に伴う発掘調査（第2次・3次調査）	27
駅南区画整理事業に伴う発掘調査	30
商業店舗建設に伴う発掘調査	33
地上デジタルテレビ放送設備建設に伴う発掘調査	39

4. 史跡整備事業の概要

2010（平成22）年度 鬼城山環境整備事業	43
------------------------	----

5. 付 載

一丁塚古墳群の測量調査	45
山手地区果樹園採集の玉類について	49

目 次

第1図 立会・試掘・確認・発掘調査位置図 ：高梁川以西 (S=1/50,000)	7	第34図 T-2断面図 (S=1/60)	21
第2図 立会・試掘・確認・発掘調査位置図 ：高梁川以东 (S=1/40,000)	8	個人住宅建設に伴う立会調査 (南溝手遺跡)	
無縁基地局建設に伴う試掘調査		第35図 調査地位置図 (S=1/5,000)	22
第3図 調査地位置図 (S=1/5,000)	9	第36図 調査箇所位置図 (S=1/600)	22
第4図 調査箇所位置図 (S=1/600)	9	第37図 土層柱状図 (S=1/40)	22
第5図 土層断面図 (S=1/40)	9	集合住宅建設に伴う確認調査 (真壁遺跡)	
分譲住宅宅地造成に伴う立会調査		第38図 調査地位置図 (S=1/10,000)	23
第6図 調査地位置図 (S=1/20,000)	10	第39図 トレンチ位置図 (S=1/600)	23
第7図 調査箇所位置図 (S=1/1,500)	10	第40図 土層断面図 (S=1/60)	23
第8図 土層柱状図 (S=1/60)	10	第41図 出土遺物 (S=1/4)	23
土砂採取事業に伴う確認調査 (持谷遺跡)		特別養護老人ホーム建設に伴う試掘調査	
第9図 調査地位置図 (S=1/50,000)	12	第42図 調査地位置図 (S=1/4)	24
第10図 開発区域図 (S=1/10,000)	12	第43図 調査地トレンチ位置図 (S=1/2,500)	24
第11図 遺構配置図 (S=1/200)	12	個人住宅建設に伴う立会調査 (窪木遺跡)	
昭和中学校耐震工事に伴う立会調査		第44図 調査地位置図 (S=1/20,000)	25
第12図 調査地位置図 (S=1/5,000)	13	第45図 調査箇所位置図 (S=1/500)	25
第13図 土層柱状図 (S=1/40)	13	第46図 土層断面図 (S=1/120)	25
集合住宅建設に伴う立会調査 (鶴上遺跡)		市道 (南溝手3024号線) 改良工事に伴う 発掘調査 (第2次・第3次調査)	
第14図 調査地位置図 (S=1/10,000)	14	第47図 調査地位置図 (S=1/50,000)	29
第15図 調査箇所位置図 (S=1/400)	14	第48図 調査区位置図 (S=1/5,000)	29
第16図 調査箇所平・断面図 (S=1/80)	14	第49図 遺構配置図 (S=1/200)	29
個人住宅建設に伴う立会調査		駅南区画整理事業に伴う発掘調査	
第17図 調査地位置図 (S=1/5,000)	15	第50図 調査地位置図 (S=1/5,000)	30
第18図 調査箇所位置図 (S=1/400)	15	第51図 区画道62号線3区遺構配置図 (1/200)	31
第19図 土層柱状図 (S=1/40)	15	第52図 区画道19号線3区遺構配置図 (1/200)	31
分譲住宅宅地造成に伴う立会調査		第53図 区画道15号線遺構配置図 (1/200)	32
第20図 調査地位置図 (S=1/5,000)	16	商業店舗建設に伴う発掘調査	
第21図 土層柱状図 (S=1/40)	16	第54図 調査地位置図 (S=1/5,000)	33
個人住宅宅地造成に伴う試掘調査		第55図 店舗配置図 (S=1/1,000)	34
第22図 調査地位置図 (S=1/25,000)	17	第56図 トレンチ1土層断面図 (S=1/60)	35
第23図 トレンチ位置図 (S=1/700)	17	第57図 トレンチ2土層断面図 (S=1/60)	36
第24図 土層断面図 (S=1/80)	17	第58図 防火水槽部分の遺構配置図 (S=1/100)	36
個人住宅宅地造成に伴う立会調査		第59図 調整池部分の遺構配置図 (S=1/100)	37
第25図 調査地位置図 (S=1/5,000)	18	地上デジタルテレビ放送設備建設に伴う発掘調査	
第26図 丘陵裾位置図 (S=1/1,000)	18	第60図 調査地位置図 (S=1/5,000)	39
第27図 出土遺物 (S=1/4)	18	第61図 1985 (昭和60) 年調査の遺構配置図 (S=1/400)	40
個人住宅建設に伴う立会調査		第62図 遺構配置図 (S=1/250)	42
第28図 調査地位置図 (S=1/20,000)	19	一丁坊古墳群の測量調査	
第29図 調査箇所位置図 (S=1/5,000)	19	第63図 一丁坊古墳群位置図 (S=1/10,000)	45
第30図 土層断面図 (S=1/60)	19	第64図 一丁坊1～4号墳測量図 (S=1/500)	47
集合住宅建設に伴う確認調査		果樹園採集の遺物について	
第31図 調査地位置図 (S=1/5,000)	20	第65図 採集地位置図	49
第32図 トレンチ配置図 (S=1/400)	21	第66図 玉類実測図	51
第33図 T-1断面図 (S=1/60)	21		

図 版 目 次

<p>無線基地局建設に伴う試掘調査</p> <p>第1図版 土層断面…………… 9</p> <p>昭和中学校耐震工事に伴う立会調査</p> <p>第2図版 土層断面…………… 13</p> <p>分譲住宅地造成に伴う立会調査</p> <p>第3図版 調査地遠景…………… 16</p> <p>第4図版 土層断面…………… 16</p> <p>集合住宅建設に伴う確認調査</p> <p>第5図版 調査地遠景…………… 21</p> <p>第6図版 T-1断面…………… 21</p> <p>個人住宅建設に伴う立会調査</p> <p>第7図版 土層断面…………… 22</p> <p>駅南区画整理事業に伴う発掘調査</p> <p>第8図版 区画道62号線3区遺構完掘状況 (東から)…………… 31</p> <p>第9図版 区画道62号線3区住-1完掘状況 (南から)…………… 31</p> <p>第10図版 区画道62号線3区 調査区南端電煙道検出 状況(北から)…………… 31</p> <p>第11図版 区画道62号線3区 調査区南端電煙道完掘 状況(東から)…………… 31</p>	<p>第12図版 区画道19号線3区溝完掘状況(南から)… 32</p> <p>第13図版 区画道19号線3区遺構完掘状況 (西から)…………… 32</p> <p>第14図版 区画道15号線遺構完掘状況(北から)… 32</p> <p>第15図版 区画道15号線遺物出土状況 …… 32</p> <p>商業店舗建設に伴う発掘調査</p> <p>第16図版 トレンチ1 水路 …… 35</p> <p>第17図版 トレンチ2 小畦 …… 35</p> <p>第18図版 小畦の検出状況(南東から) …… 36</p> <p>第19図版 出土遺物 …… 38</p> <p>地上デジタルテレビ放送設備建設に伴う発掘調査</p> <p>第20図版 A区遺構検出状況 …… 40</p> <p>第21図版 B区遺構検出状況 …… 41</p> <p>第22図版 出土遺物 …… 41</p> <p>2010(平成22)年度 鬼城山環境整備事業</p> <p>第23図版 園路整備 …… 44</p> <p>第24図版 板塀・敷石整備 …… 44</p> <p>第25図版 土塁完成 …… 44</p> <p>果樹園探査の遺物について</p> <p>第26図版 採集された玉類 …… 52</p>
--	--

表 目 次

<p>表1 講師派遣一覧…………… 4</p> <p>表2 立会・試掘・確認調査一覧 …… 5・6</p>	<p>表3 発掘調査一覧…………… 6</p> <p>表4 ガラス小玉の色調・法量分布表…………… 52</p>
---	--

1. 総社市埋蔵文化財行政の概要

2010（平成22）年度埋蔵文化財行政の概要

本市における文化財行政は、教育委員会文化課文化財係が担当しており、埋蔵文化財を始めとした文化財全般の調査・保護・啓発を主たる業務としている。

〈組織〉

教育長	柴田 交三	〈埋蔵文化財学習の館〉	
教育次長	加藤 信二	館長	村上 幸雄
課長	荒木 泰行	臨時職員	田中 富子
主幹	谷山 雅彦	臨時職員	犬飼 慎弓
〈係長兼務〉			
課長補佐	平井 典子	〈鬼城山ビジターセンター〉	
課長補佐	武田 恭彰	指導員	脇本 浩
主査	前角 和夫	指導員	秋山 浩一
主査	高橋 進一		
主任	笹田 健一		
主任	松尾 洋平（～2011年3月31日）		
主任	石井 淳一		

埋蔵文化財

2010（平成22）年度も、引き続き景気の低迷と、公共事業の縮小によって、発掘調査の件数および調査面積は少なく、大規模な遺跡の破壊は免れている。

民間事業に伴う発掘調査は、大規模商業店舗建設に伴うものが1件、地上デジタル化に伴うテレビ放送設備の建設に伴うものが1件とわずか2件にすぎない。

しかしながら、個人住宅の建設や、近年盛んに開発されている携帯基地局などの通信設備建設事業は増加しており、埋蔵文化財包蔵地の問い合わせや文化財保護法93条の埋蔵文化財発掘の届出も、その8割強が両者によるものである。

通信設備の建設は、山間部や人家から離れた場所が選地されることから、比較的遺跡の存在しない場所が多く、遺跡が破壊されることから免れている。しかし、個人住宅などは近年耐震のためそのほとんどが地盤改良をするため、小面積の鋼管杭や柱状改良によるものは対応が困難である。包蔵地に近い箇所や、地形からみて遺跡が立地しそうな地域は、できるだけ試掘調査を実施し、遺跡の有無と密度を把握するように努めている。

公共事業に伴うものとしては、1994（平成6）年度からの駅南区画整理事業に伴う調査が継続して実施されているが、事業が終盤を迎え縮小され、家の移転後の狭小な道路部分を発掘している。その他は、昨年度から引き続き実施した市道改良工事に伴う調査が行われたにすぎない。

このように発掘調査が減少したことから、保護啓発や報告書の作成に重点を移し取り組んでいきたい。

文化財保護および普及啓発

2001（平成13）年度から実施した鬼城山整備事業は、今年度で10年目を迎え、西門・角楼を中心とした復元ゾーンの整備と、北門の表示整備が終了した。当初計画に上がっていたが整備できなかった遺構もあり、中でも、南門・東門・礎石建物群などの主要な遺構は、2011（平成23）年度から3年間で表示整備を行う予定である。これらの遺構は、車両が進入できない箇所であり、すべて人力で整備を行うことから、遺構の保護に重点を置いた小規模で簡易な表示整備を実施する。

なお、10年間で主要な整備事業が終了したことから、2011（平成23）年5月29日（日）に完成記念事業として、シンポジウムを実施するべく、2011（平成23）年3月26日に実行委員会を立ち上げ、4月以降本格的に準備を行っていく予定である。

史跡の下刈り清掃は、例年どおり国指定では作山古墳・鬼城山・福山城、県指定では宮山天笠古墳周辺・江崎古墳、栢寺廃寺、秦原廃寺において実施している。

市指定史跡では角力取山古墳・経山城・歴史広場の下刈り清掃を委託し、宿寺山古墳・赤坂龍塚古墳・幸山城および一里塚の草刈り清掃を補助金で対応している。

なお、作山古墳に関しては、下草刈りによる草木を現地で焼却できなくなったため、チップ化して古墳内に残していたが、チップが固まり地形が変形していったため、数年前から委託して草木を清掃工場まで運搬している。

また、作山古墳や角力取山古墳では枯れ松が目立ち、景観的な問題と見学者の安全を図るため、今年度も枯れ松の伐採を実施した。

県指定天然記念物：角力取山の大松は、松くい虫の予防を2回にわたり実施し、支柱の補修も行った。国指定の福山城は、草刈のほか維持管理のため、年に6回以上の見回り業務を委託している。

見学者の利便をはかるため、市指定史跡鬼ノ身城の看板を作り替え、藤原為貞宝篋印塔の標柱を設置した。市指定史跡には、標柱のないものや標柱が老朽化しているものも見られ、今後も順次標柱を設置していく予定である。その他、経山城への登り口がわかりにくいことから、プレートによる誘導指示を行った。

今年度、文化財係で印刷した刊行物は以下のとおりである。

『鬼城山—国指定史跡鬼城山環境整備事業報告—』

『長良小田中遺跡』『総社市埋蔵文化財発掘調査報告』22

『総社市埋蔵文化財調査年報』20

パンフレット『発掘！ 駅南』

『総社の文化財』（指定文化財・国登録有形文化財のマップ）

なお、今年度は、懸案事項であった指定文化財（国・県・市）のホームページを、画像とともに一般の人にわかりやすい表現に努めて作成した。

その他、市内外の講座や見学依頼なども積極的に取り組んでおり、その内容は別表のとおりである。

遺物等の貸出については、下記の4件がある。

- ・上原遺跡 土製仮面1点、写真1点

大阪府立弥生文化博物館

平成22年度夏季特別展「MASK—仮面の考古学」で展示

- 貸出期間：2010年6月28日～9月30日（写真資料以外）
- ・御所遺跡 木筒1点、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器127点、写真11点
井原市教育委員会
夏季企画展「吉備の文化財探訪①—国府を掘る 備中国府の発掘調査の成果より—」で展示
貸出期間：2010年7月23日～9月17日
 - ・史跡鬼城山 須恵器11点・建材2点、地形模型・西門復元模型 各1点、写真9点
岡山県立博物館
平成22年度特別展「鬼ノ城～謎の古代山城～」で展示
貸出期間：2010年9月10日～10月17日
 - ・こうもり塚古墳 双龍環頭大刀1点
緑山古墳 銀象嵌把頭1点
岡山県立博物館
平常展 冬期展（3）・春季展（1）考古分野テーマ展「装飾大刀の世界」に展示
貸出期間：2011年1月上旬～4月上旬

写真及び図面資料の借用・掲載については14件の依頼があったが、そのうちの8件は鬼ノ城に関するものであった。

今年度は、第25回国民文化祭が岡山県で開催された。担当は文化課文化振興係であるが、主要事業の一つが、『古代吉備の風景』というシンポジウムであったため、文化財係が主体的に関わった。シンポジウムは11月3日（祝）に開催され、約1,100人の参加を得た。テーマおよび発表者は以下のとおりである。

基調講演 『古代の吉備の輝き』上田正昭（京都大学名誉教授）

シンポジウム 『さまざまな視点から見た吉備の風景』

コーディネータ 神埼宣武（民俗学者）

パネリスト 武田佐知子（大阪外国語大学 教授）

上野 誠（奈良大学 教授）

朴 天秀（韓国：慶北大学校 教授）

亀田修一（岡山理科大学 教授）

なお、国民文化祭に関連して県内で実施されたシンポジウムの記録集が、『温故知新』というタイトルで県から刊行されている。

（平井典子）

表1 講師派遣一覧

	日付	依頼先等	内 容	職員
1	平成22年4月5日	県立大学新入生オリエンテーション	紹介「総社市の文化財について」	谷山
2	平成22年4月15日	総社市中央公民館講座福寿学級	講座「埋蔵文化財について」	高橋
3	平成22年4月23日	総社市新任職員研修	講座「古代吉備のクニ」案内 鬼ノ城	平井
4	平成22年4月27日	県立博物館を誘致する会	講演「古代吉備のクニと総社市」	平井
5	平成22年5月20日	総社市山手公民館女性学級	案内 鬼ノ城	平井
6	平成22年5月27日	総社市清音有志	案内 鬼ノ城	谷山
7	平成22年5月30日	総社市山手・西郡分館講座	講座「古代吉備のクニについて」 案内 標葉遺跡・王墓山古墳群	平井
8	平成22年6月4日	香川県埋蔵文化財センター	旧練兵場遺跡 吉備搬入土器 実見	平井
9	平成22年7月2日	県立博物館	案内 鬼ノ城	松尾
10	平成22年7月9日	NPO法人 吉備野工房ちみち	案内 吉備路	谷山
11	平成22年7月17日	広島県立歴史資料館	講演「弥生土器から見た地域性」	平井
12	平成22年7月29日	総社市常盤集会所	講座「江戸時代総社の人物」	笹田
13	平成22年8月20日	総社市教員新任研修	案内 市内文化財	平井
14	平成22年8月21日	総社市ボランティアガイド	講座「鬼ノ城について」	松尾
15	平成22年9月2日	日本旅行/パナソニック	案内 市内史跡	谷山
16	平成22年9月11日	建部町公民館	玉つくり教室	高橋
17	平成22年9月15日	総社市長良集会所	講座「長良地区の歴史」	笹田
18	平成22年9月19日	オーストラリア中高生・市内中学生	案内 宝福寺・園分寺・鬼ノ城	平井
19	平成22年9月27日	総社市楽地区福祉協議会	案内 鬼ノ城	高橋
19	平成22年10月8日	住宅建築課 (全国大会)	案内 鬼ノ城	前角 松尾
20	平成22年10月20日	総社市長良集会所	講座「古代吉備のクニと長良」	平井
21	平成22年11月6日	NPO法人 吉備野工房ちみち	案内 吉備路の史跡	谷山
22	平成22年11月8日	国民文化祭民話の祭典出演者	案内 鬼ノ城・園分寺	前角
23	平成22年11月25日	総社市清音公民館	講座「三因古墳群とその時代」	前角
24	平成22年12月1日	総社市西公民館	講座「指定文化財について」	前角
25	平成22年12月5日	総社市昭和公民館	宝福寺・園分寺周辺史跡案内	平井
26	平成22年12月11日	県立大学博物館実習	案内 鬼ノ城	谷山
27	平成22年12月12日	県立大学博物館実習	講座「日本の歴史と吉備のクニ」 学習の館見学 ガラス玉つくり教室	平井 高橋
28	平成22年12月12日	NPO法人 吉備野工房ちみち	案内 古墳	平井
29	平成23年1月15日	総社市中原会館	講座「総社市の歴史について」	平井
30	平成23年1月29日	遊山古墳群生会	古墳案内 (作山・角力取山・江崎古墳)	平井
31	平成23年2月26日	赤磐市山陽町公民館	玉つくり教室	高橋
32	平成23年2月26日	総社市ボランティアガイド	講座「岩屋について」	武田
33	平成23年2月26日	総社シルバー人材センター	講座「鬼ノ城について」・現地案内	平井
34	平成23年3月25日	ひだまりの家ふれあいサロン	講座「清音柿木の歴史と文化財」	前角

表2 立会・試掘・確認調査一覧

番号	所在地	調査原因	種別	調査期間	調査所見	報告頁
1	高原字大島1065-5・10	個人住宅	立会	2010年 4/16	中・近世土器小片僅少 散布地	—
2	清音黒田	携帯基地局	立会	4/19	谷部 遺構・遺物なし	—
3	井手字八反地183	住宅造成	立会	4/20	旧水田層厚く堆積 低位部	—
4	窪木字本台623	電柱建設	立会	4/20	表土直下地山 遺構・遺物なし	—
5	見延64-1	無線基地局	試掘	4/21	明治以降の石垣を覆う造成 土が見られるのみ	—
6	駅前2丁目12-15	個人住宅	立会	5/7	造成土直下に旧耕作土 その下層は砂礫層 高梁川の氾濫原	—
7	種井字南側127-1	無線基地局	立会	5/12	高梁川の氾濫原	9
8	楽1215	グランドゴルフ場	立会	6/7	掘削範囲を確認し古墳2基 をコースからははずす	—
9	三輪字中通1102-1, 1103-1	保育園建設	立会	6/17	グライ化 低位部	—
10	福井字神明232-3	個人住宅	立会	6/18	土器細片混入	—
11	地頭片山荒田ノ町71-1, 72-1	分譲住宅宅地造成	立会	6/24	遺構・遺物なし	10
12	山田字西谷2307外	土取採取	確認	8/10~8/23 12/3 2011年3/18	弥生・中世の集落 前期古墳	11・12
13	美袋1636	学校耐震工事	立会	8/20	柱穴1基検出	13
14	総社3丁目1091-1, 1093, 1094-2	集合住宅	立会	8/24	中世以降の遺構検出	14
15	総社3-3	個人住宅		8/26	砂層, 旧河道か? 遺構・遺物なし	—
16	三須字水落1227-10ほか	個人住宅	立会	9/3	低位部	—
17	北溝字手鋸先キ427-7, 427-9	個人住宅	立会	9/27	低位部	15
18	溝口字町並272	分譲宅地宅地造成	立会	10/4	低位部	16
19	地頭片山字往還の下31-4 の一部	個人住宅宅地造成	試掘	10/4	山土起源の堆積 遺構・遺物なし	17
20	岡谷字山の端261-6, 261-10	個人住宅宅地造成	立会	10/5	角力取山古墳から転落した 埴輪片などが出土	18
21	西阿曾1257-10	個人住宅	立会	11/4	遺構・遺物なし	19
22	北溝手427	個人住宅	立会	12/13	粗い砂層堆積 低位部	—
23	三輪685-7外	分譲住宅	確認	2011年1/7	微高地上 遺構なし	20・21
24	南溝手字仁左衛門253-2, 254	個人住宅	立会	1/12	柱穴1基検出	22
25	中央6丁目7-114の一部	集合住宅	試掘	1/13	須恵器片1点出土	23
26	下林字法蓮1226-5	個人住宅	立会	2/1	山土起源の堆積 遺構・遺物なし	—

27	上原139	個人住宅	立会	2/10	造成土内で掘削終了	-
28	延原	携帯基地局	立会	2/20	緩斜面を1~2mカットした畑地。流土が厚く堆積。遺構・遺物なし	-
29	富山	携帯基地局	立会	2/20	緩斜面を約1mカットした畑地。流土堆積。遺物なし	-
30	中央4丁目16-111	集合住宅	試掘	2/28	低位部	-
31	小寺字一本木958他	特別養護老人ホーム	試掘	3/3	谷部 遺構・遺物なし	24
32	三輪字鷹尾手1032-4	個人住宅	確認	3/7	低位部 遺構・遺物なし	-
33	富原字大横352-6, 355-5	個人住宅	立会	3/10	低位部 遺構・遺物なし	-
34	窪木字前場661-1	個人住宅	立会	3/23	造成段階に擦壁掘削時住居跡などの遺構確認	25

表3 発掘調査一覧表

番号	遺跡名	所在地	調査原因	調査期間	報告頁
A	窪木遺跡	窪木889-10ほか	道路改良	2009年10/8~2010年6/30 (第2次) 9/1~10/31 (第3次)	27~29
B	三輪遺跡群	三輪696ほか	区画整理事業	2010 4/21~6/3 2011 3/2~3/8	30~32
C	伊予部山弥生墳丘墓	下原字伊与部山694-6ほか	通信設備建設	2010年 7/12~7/17	33~38
D	井尻野西川遺跡	井尻野西川田340-1ほか	商業店舗建設	8/16~24	39~42



第1図 立会・試掘・確認・発掘調査位置図：高梁川以西 (S=1/50,000)



第2図 立会・試掘・確認・発掘調査位置図：高梁川以東 (S=1/40,000)

2. 立会・試掘・確認調査の概要

無線基地局建設に伴う試掘調査

所在地 総社市種井字南側127-1

調査日 2010(平成22)年5月12日

調査概要

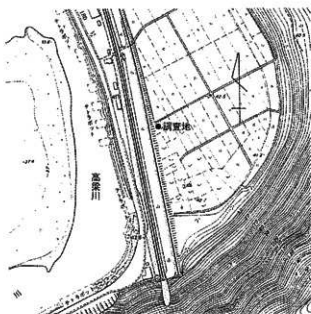
調査地は総社市北部の種井に所在し、JR伯備線の東側に隣接した畑地に位置する。

高梁川の東岸にあたる種井の集落は小扇状地に立地しており、集落の扇尖部と調査地との比高差は約9mも下がっている。

今回、携帯無線基地局の建設工事に伴い鉄塔の建設と周辺機器の設置が計画された。当地は埋蔵文化財の包蔵地外ではあったが、周辺の状況が不明なため鉄塔の基礎部分を対象に試掘調査を実施した。層序は2層から7層が全て軟質な砂質土、もしくは砂層であり洪水砂が厚く堆積していた。

調査の結果、高梁川の攻撃面である当地に遺構・遺物はなく、氾濫原であることが判明した。

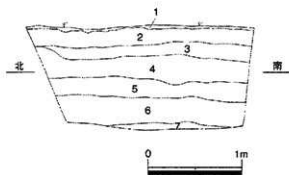
(松尾洋平)



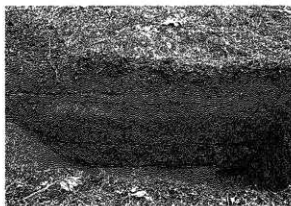
第3図 調査地位置図 (S= 1/5,000)



第4図 調査箇所位置図 (S=1/600)



1. 表土
2. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3)
3. にぶい黄褐色砂質土 (10YR6/3)
4. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2)
5. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2)
6. にぶい黄褐色砂 (10YR7/3)
7. 灰黄褐色砂 (10YR4/2)



第1図版 土層断面

第5図 土層断面図 (S=1/40)

分譲住宅宅地造成に伴う立会調査

遺跡名 散布地

所在地 総社市地頭片山字荒田ノ町71-1外

調査日 2010(平成22)年6月24日

調査概要

調査地は総社市山手支所より西南西へ約300m離れた水田に位置し、東側には道路を挟んで明治池が見渡せる。水田は南から北へ土段状に下り、古く耕地整理が行われた事を推測させた。

当地では敷地全体を盛土し、8戸分の分譲宅地造成が予定され、敷地北側の外周にはL型擁壁が設置されることになった。そのため、擁壁を設置する前の掘削時に工事立会を実地した。調査箇所は延長が60m以上あり、4カ所で柱状図を作成して遺構と地形の状況について観察することにした。

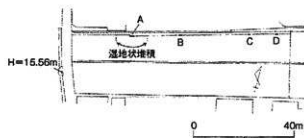
層序は1層が耕土、2層・3層は耕地整理に伴う造成土と考えられる。A地点では4層から7層が暗灰色系の暗い色調で、粘性があり湿地状の堆積を示している。このうち、5層からはローリングを受けた珪土土器片が含まれていた。A地点からB地点の下層では、花崗岩バイ乱土の硬い地山(11層)を検出し、西側に向けて上昇しつつ、東側はB地点からC地点の間で下降していた。

C地点からD地点は、9層が黒灰色の旧耕作土であり、以下の10層から16層は花崗岩バイ乱土の砂質土、および粘質土である。

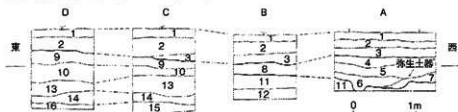
調査の結果、当地では遺跡を確認できなかったが、地山からみた旧地形は、西側に地頭古墳群が造営された南北方向の尾根筋があり、地山の上昇と符合する。調査地の中央付近から東へは地山が下降することから明治池の周辺まで埋没谷が存在すると考えられる。(松尾)



第6図 調査地位置図 (S=1/20,000)



第7図 調査箇所位置図 (S=1/1,500)



- | | | |
|---------------------------|---------------------------|------------------------------|
| 1. 耕土 | 7. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) | 13. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3), 粘土混 |
| 2. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2), 整地層 | 8. 黄色粘土 (2.5Y8/6) | 14. 褐灰色砂質土 (10YR5/1) |
| 3. 黄灰色砂質土 (2.5Y6/1), 造成土 | 9. 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1), 旧耕作土 | 15. 褐灰色砂質土 (10YR5/2) 谷部堆積による |
| 4. 褐灰色砂質土 (10YR5/1), 粘性あり | 10. 褐灰色砂質土 (10YR6/1) | 16. 明黄褐色粘土 (10YR6/6) |
| 5. 褐灰色砂質土 (10YR4/1), 粘性あり | 11. 浅黄色砂質土 (2.5Y7/4), 地山 | |
| 6. 黄灰色粘質土 (2.5Y5/1) | 12. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/4) | |

第8図 土層柱状図 (S=1/600)

土砂採取事業に伴う確認調査

遺跡名 狩谷遺跡

所在地 総社市山田字西谷2307地外

調査期間 2010（平成22）年8月10日～8月23日，12月3日，2011（平成23）年3月18日

調査地は，総社市山田地区と久代地区の境界にあたる南に延びる低い尾根上に所在する。この尾根では2002（平成14）年度に農業基盤整備事業に伴い尾根の西側斜面の調査を実施し，弥生時代の住居址や中世の段状住居遺構が多数確認されている。

今回の確認調査は，この尾根を対象として計画された開発面積約7000㎡の土砂採取事業に伴うもので，進入路にあたる約1000㎡については2010（平成22）年8月に対応し，本体部分については2010（平成22）年12月に確認調査を実施した。

またその後，2011（平成23）年3月にそれまでの確認調査の結果を受け，当面の土砂採取を可能にするため，当初の予定を変更し新たに掘削を開始する進入路部分についての立会を行った。

進入路部分（第11図）は，本来は緩やかな尾根の稜線に相当する部分であるが，後世の畑の開墾により著しく削平されている。このため確認調査着手以前は遺構の残存状況が悪いことが予想されたが，地形が若干下降する東側斜面でのみ削平を免れた中世の柱穴と弥生時代の住居址・段状遺構・貯蔵穴が確認された。

開発本体部の確認調査は，樹木の伐採後に重機を用いて尾根の西側斜面と稜線上に設定したトレンチを掘り下げ遺構の確認を行った。

調査以前の対象地は比高差の少ない瘦せた尾根で，樹木伐採後でも古墳の墳丘らしい高まりは視認できなかったが，稜線上のトレンチで近接して古墳の周溝らしい溝が確認され，開発範囲内には少なくとも4基の前期古墳（第10図）が連なって存在することが予想された。

さらに，用地買収されているが今回の開発対象区域外の尾根稜線上にも，確認された4基の古墳に連なって古墳らしいわずかな高まりが認められ，多数の前期古墳が尾根稜線上に並ぶ状態で存在すると考えられる。また，進入路部分と同様に，東側斜面の一部に弥生時代とみられる住居址も確認された。

以上の確認調査の結果を受け，開発業者と遺跡の保存についての協議を行い，遺構が確認された部分の開発は一旦保留し，開発予定部の西半分について開発対象とするため改めて進入路を変更して設置することになった。このため，その部分についての確認調査を重機を用いて行い，遺構の有無を精査したが対象地はやや上昇する尾根稜線に相当するため，後世の削平により畑とされ地形が改変されており，最初の進入路のような遺構は検出されなかった。

また，現状は竹林である尾根の西側斜面は東側に比べると緩い傾斜であるが，やはり後世の開墾により階段状の畑が造成されており遺構は確認できなかった。

この他，確認調査の対象範囲外の，階段状に削平・造成された東側斜面の畑の一隅で，破壊された箱式石棺と見られる小型の扁平な石材と，時期的に一括性の高い6世紀後半の須恵器が寄せ集められた状態で出土した。

このことから，現状では畑の開墾・造成で大きく地形が改変されて視認できないが，この尾根の緩い斜面には墳丘・形態は不明なものの古墳が存在した可能性が十分考えられる。

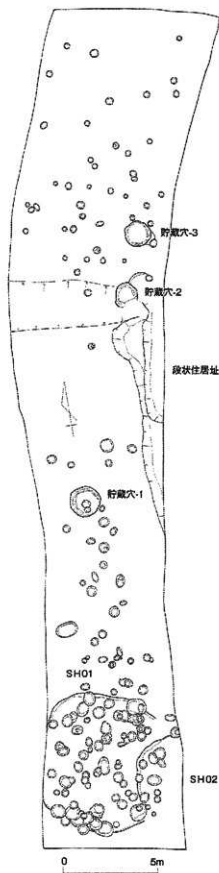
（武田恭彰）



第9図 調査地位置図 (S=1/50,000)



第10図 開発区域図 (S=1/10,000)



第11図 遺構配置図 (S=1/200)

昭和中学校耐震工事に伴う立会調査

遺跡名 広畑遺跡

所在地 総社市美袋1636

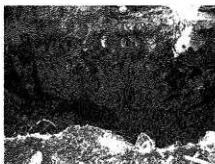
調査期間 2010（平成22）年8月20・31日

調査概要

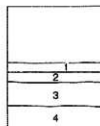
総社市立昭和中学校の校舎基礎の耐震工事を実施するにあたり、校舎基礎の周辺を掘削する必要が生じたため、立会調査を実施した。

昭和中学校敷地内では、2006年度に屋内運動場建設に伴って発掘調査が行なわれ、弥生時代から中世にかけての遺構が検出されている。なかでも、7世紀から平安時代にかけては数多くの遺構が認められ、平行して掘られた幅2～2.5mの溝の周辺に鍛冶炉・炭焼成土壇・柱穴・方形の掘り方をもつ掘立柱建物等が検出された。また緑釉陶器を含む土器の他、鉄器・鉄滓・砥石等の鍛冶関係の遺物が多く認められた。このほか土壇墓と考えられる遺構も数基認められ、中世には完形の碗等が埋納されていたり、人骨が遺存しているものも認められている。

今回の立会調査では、中学校建設に伴って造成されたと考えられる客土の下層は、旧水田層～暗茶灰褐色砂質土～茶灰褐色砂質土の順で堆積していた。遺構としては、暗灰褐色土の入る柱穴1が検出されたのみであったが、基本的に屋内体育館で調査された状況とほぼ同様であると考えられる。

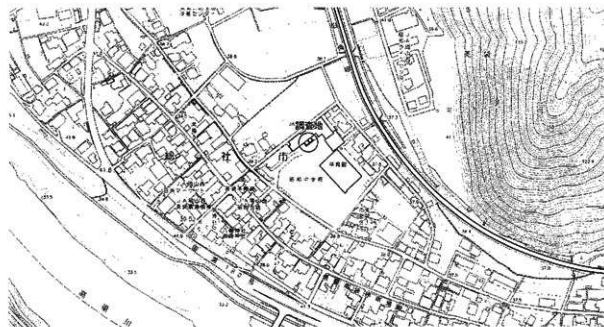


第2図版 土層断面



1. 水田耕作土
2. 淡黄（灰）色砂質土
3. (地) 茶灰褐色砂質土
4. 茶灰褐色砂質土

(高橋進一) 第13図 土層柱状図 (S=1/40)



第12図 調査地位置図 (S=1/5,000)

集合住宅建設に伴う立会調査

遺跡名 諸上遺跡

所在地 総社市総社3丁目1091-1, 1093, 1094-2

調査日 2010(平成22)年8月24日

調査概要

調査地は東総社駅から東へ約550m離れた住宅街に位置し、総社小学校の東側に近接している。

周辺では旧集落の縁辺部に宅地化が進行しており、今回、当地では既在の住宅を解体して2棟の集合住宅が建設されることになった。敷地内には東西に2棟の建物が建設予定で、西棟は敷地造成土内で基礎が収まり遺跡に与える影響はなかった。しかし、東棟については建物の基礎下に地盤改良を施すため遺跡に与える影響が懸念された。事業者と設計変更について協議した結果、造成土内に基礎が収まるよう工法が変更され、遺跡は盛土内に保存されることになった。

東棟については、事前に確認調査を実施する旨で事業者とも合意していたため、8月24日に確認調査を実施した。調査日には敷地東辺の擁壁掘削が施工されており、急遽この部位の確認調査に切り替え、遺跡の状況を把握することにした。

擁壁掘削部は長さ30mに及ぶため、柱状図を3カ所で作成した。層序は1層・2層が客土であり、3層は炭・土器粒などを多く含む遺物包含層であった。4層は土器・焼土粒をわずかに含み砂粒は細かく、上面が遺構面となる。C地点では柱穴が掘り込まれ近代の瓦小片が含まれ、B地点では遺跡面において炭散布が認められた。5層は軟質の無遺物層で以下は礫層へと移行していた。

調査の結果、中世以降の遺構を4層上面で確認した。調査地南側の集合住宅では小規模な試掘調査により中世の遺構が検出されており^{註1}、総社小学校のプール建設時の発掘調査では、同じく中世の遺構が確認されていることから^{註2}、当地まで中世集落の広がりを確認することができた。

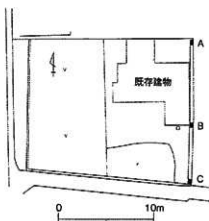
(松尾)

註1 「総社小学校プール建設に伴う発掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』9 総社市教育委員会 1999年

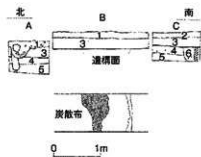
註2 「共同住宅建設に伴う試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』16 総社市教育委員会 2007年



第14図 調査地位位置図
(S=1/10,000)



第15図 調査箇所位置図
(S=1/400)



1. 暗オリーブ褐色土 (2.5Y3/3), 遺成土
2. 明黄褐色土 (10YR7/6), 変土
3. オリーブ褐色砂質土 (2.5Y4/4), 砂粒・土器片包含
4. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/3)
5. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2), 軟質砂多
6. 粗灰色砂質土 (10YR5/1), 炭倉

第16図 調査箇所平・断面図
(S=1/80)

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市北溝手字鉦先キ427-7外

調査日 2010（平成22）年9月27日

調査概要

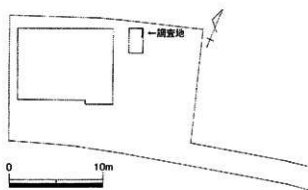
調査地はJR服部駅から西へ約200m離れた水田に位置する。当地は六カ郷用水に近く水田地割から旧河道が推測されることもあり、これまでに遺跡は発見されていない。

今回、宅地造成と共に個人住宅が建設されることから、浄化槽掘削時に立会調査を実施し、遺跡の有無を確認することにした。

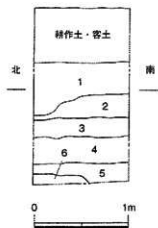
土層の断面観察によると、層序は1層が耕作土・客土で、2層は近世に地上げを行った水田層と考えられる。3層から5層は粘性があり、下層になるにしたがい硬くしまり粘土化し、5層は腐食した有機質の堆積により黒褐色となっていた。6層は一転して灰白色砂となり旧河道の堆積と考えられる。

調査の結果、遺構・遺物はなく、当地は西山山塊の南裾を東流する旧河道の縁辺にあたる低位部に推定される。

（松尾）



第18図 調査箇所位置図 (S=1/400)



第19図 土層柱状図 (S=1/40)



第17図 調査地位置図 (S=1/5,000)

分譲住宅地造成に伴う立会調査

所在地 総社市溝口272

調査期間 2010 (平成22) 年10月4日

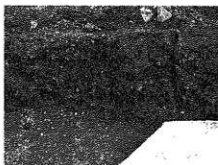
調査概要

分譲住宅地造成予定地は、総社駅の西に位置しており、遺跡包蔵地には含まれていないが、東南約400mに因ノ木遺跡が、北東約400mに中世城郭である真壁城が存在している。このうち真壁城は、築土大垣をめぐらせた方一町(推定120m×100m)程度の平城であったと推定されており、近年まで土塁の痕跡が観察されていたとされている。このような状況と周辺での調査例も乏しいため、立会調査を実施することとした。

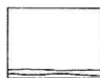
立会調査は、調査地の6区画の分譲住宅地の中央に、東西方向に進入路を敷設することによって側溝水路を埋設した際に実施した。調査地は、旧水田耕作土の上に約70cmの客土がされていた。旧水田耕作土の下層は、砂質の強い淡茶灰黄色砂質土であった。これらの状況から、進入路建設予定地は低湿地内に位置していると推定される。(高橋)



第3図版 調査地遠景

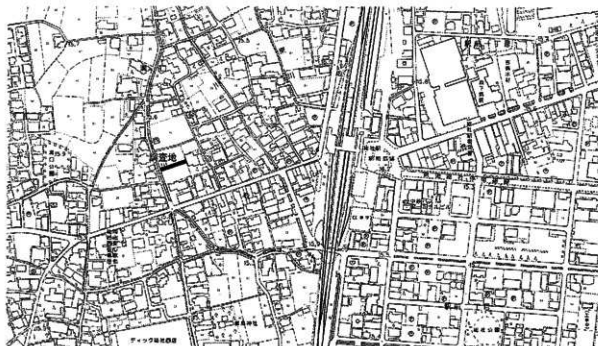


第4図版 土層断面



1. 客土
2. 旧耕作土
3. 淡茶灰黄色砂質土層

第21図 土層柱状図
(S=1/40)



第20図 調査地位置図 (S=1/5,000)

個人住宅宅地造成に伴う試掘調査

所在地 総社市地頭片山字住還の下31-4外

調査日 2010(平成22)年10月4日

調査概要

調査地は総社市山手支所より北西へ約150m、国指定史跡作山古墳から南西へ約300m離れた水田に位置する。周辺部には和霊山・福山山塊から北側の総社平野に向けて、低丘陵地が広がり幾筋もの狭小な尾根や谷が派生している。当地は、低丘陵地から吐出された土砂の堆積により形成された扇状地の扇端部にあたり、今回、宅地の造成工事が計画された。

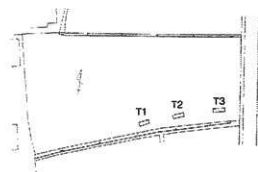
埋蔵文化財包蔵地外ではあったが、周囲に調査データが不足していることもあり、工事中に試掘調査を実施した。調査は工事に影響がない範囲で3カ所のトレンチを設定し、土層観察を行った。

層序は1層が耕作土、2層以下は花崗岩バイ乱土を基調とする砂質土、もしくは粘質土の堆積であり、堆積状況に乱れが認められた。また、T1～T3の下層で確認した9層は、硬くしまった微粒子の粘質土のため層の指標としたところ、各トレンチではかなり凹凸が認められた。

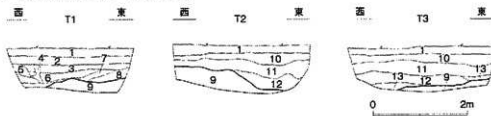
調査の結果、遺構・遺物は検出されず、マサ土起源の堆積状況や立地からみて扇状地の扇端部に位置することは確実であり、層の乱れからも不安定な地盤形成がうかがわれる。(松尾)



第22図 調査地位置図 (S=1/25,000)



第23図 トレンチ位置図 (S=1/700)



- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1. 耕作土 | 8. にぶい黄色粘質土 (2.5Y6/4) 砂質土混 |
| 2. 灰白色粘質土 (5Y7/1) 粗砂 | 9. 淡黄色粘質土 (5Y8/4) |
| 3. 淡黄色砂質土 (2.5Y7/3) | 10. 淡黄色粘質土 (5Y8/3) |
| 4. 灰黄色砂質土 (2.5Y7/2) 木炭 | 11. 淡黄色粘質土 (7.5Y8/3) |
| 5. 淡黄色ブロック (2.5Y8/4) | 12. 明黄褐色砂質土 (2.5Y7/6) |
| 6. にぶい黄色砂質土 (2.5Y6/3) | 13. 黄褐色砂質土 (10YR5/8) 鉄分多い |
| 7. 黄褐色砂質土 (2.5Y5/6) | |

第24図 土層断面図 (S=1/80)

個人住宅宅地造成に伴う立会調査

所在地 総社市岡谷字山ノ端261-6

調査日 2010（平成22）年10月5日

調査概要

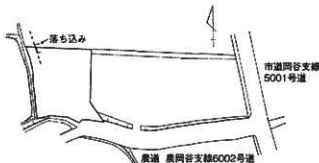
調査地は市指定史跡 角力取山古墳の北側へ約100m離れた水田に位置する。角力取山古墳は一辺約40m、高さ約6mを測る吉備最大の方墳であり、丘陵地割を含めた独立丘陵上に立地する。

今回、この丘陵先端部の水田部分に個人住宅用の宅地造成工事が計画され、外周に設置される擁壁の基礎掘削時に立会調査を実施した。工事の都合上、基礎工事が先行してしまい詳細な断面観察はできなかったが、北辺のみ観察が可能であった。擁壁北辺の西端から約3mの位置で丘陵東裾部の落ち込みを確認し、これより東側は有機質の腐食を伴う黒褐色土の堆積であった。

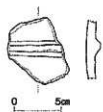
遺物は敷地西半の排土から円筒埴輪片や須恵器片などをわずかに採取した。図示した円筒埴輪は器壁の厚さが8cmを測り軟質で褐色を呈する。タガは細く突出度の低い台形で、残念ながらローリングを受けているため内外面の調整は不明である。この円筒埴輪は角力取山古墳から流出したもので、葛原分類のa類にあたり五世紀後半に比定される。

調査の結果、独立丘陵の先端部の東裾を確認し、北端は現状よりもさらに延びていたことをうかがわせ、水田開発に伴う削平のため現在、埋没していると考えられる。独立丘陵には角力取山古墳以外にも遺跡が存在することから、包蔵地の範囲を変更して埋没している丘陵先端部を含めることにし、遺跡名も「散布地」から「角力取山遺跡」と改称した。

(松尾)



第26図 丘陵据位置図 (S=1/1,000)



第27図 出土埴輪 (S=1/4)



第25図 調査地位位置図 (S=1/5,000)

個人住宅建設に伴う立会調査

所在地 総社市西阿曾1257-10

調査日 2010（平成22）年11月4日

調査概要

調査地は総社平野北東の西阿曾に所在し、阿曾幼稚園より西に約250m離れた水田部分に位置する。当地からは田面の高低差により、北から南に向かって地形が傾斜している様子が窺える。

埋蔵文化財包蔵地外ではあったが、当地域のデータを得るために個人住宅の建設にともなう、浄化槽の設置工事時に立会調査を実施した。

調査は断面観察を主眼に置き、断面図を作成した。層序は耕作土より下層が近現代の水田層（1層）であり、2～4層は粘質土と砂層の堆積で、北から南に向かって傾斜し流速の早い堆積状況であった。5層のにぶい黄褐色粘質土は全体的に暗く堅い土質であり、層上面で明確に層境になる。そして、6層は再び粗砂となっていた。この5層は高岡家西金屋跡の試掘調査の際、検出したT1の褐灰色粘質土と類似しており、層上面に敷地造成がされていた^註。

調査の結果、遺構・遺物は確認することができなかったが、古地形について知見を得ることができた。層中の4層と6層は花崗岩パイ乱土であり山土起源をもち、北側の山間部および血吸川から吐出されたものが堆積したものであり、水田化以前も北から南に地形が傾斜しつつ、氾濫と堆積作用を繰り返す不安定な土地環境であったことがうかがえる。（松尾）

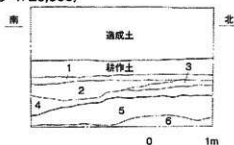
註「高岡家西金屋跡の試掘調査」『総社市埋蔵文化財調査年報』17 総社市教育委員会2008年



第28図 調査地位置図 (S=1/20,000)



第29図 調査箇所位置図 (S=1/5,000)



1. にぶい黄褐色粘質土 (10YR7/2) 水田層
2. 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)
3. 明灰黄褐色粘質土
4. 灰白色砂 (10YR8/2)
5. にぶい黄褐色粘質土 (10YR5/3)
6. 灰黄色粗砂 (2.5Y7/2)

第30図 土層断面図 (S=1/60)

集合住宅建設に伴う確認調査

遺 跡 名 三輪遺跡群

所 在 地 総社市三輪685-7外

調査期間 2011(平成23)年1月7日

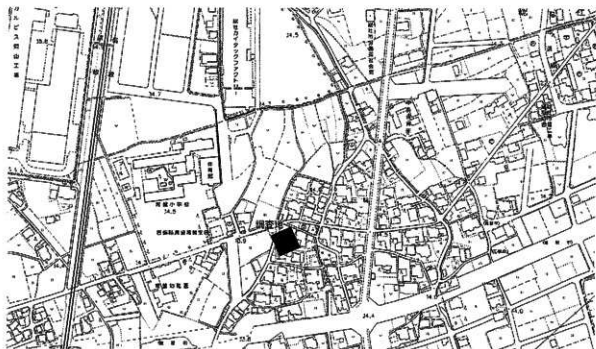
調査概要

集合住宅建設予定地の周辺は、総社駅南区画整理事業によって継続的に発掘調査を実施しており、また、近隣にある常盤幼稚園・常盤小学校でも園舎・校舎の建設に伴って発掘調査を実施していることから、確認調査を実施した。

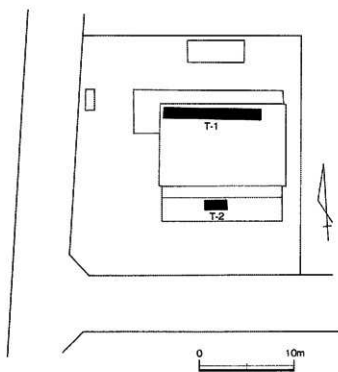
常盤幼稚園地内では、1998年度・1999年度・2008年度に園舎移転～園舎増築工事に伴って発掘調査が行なわれ、弥生時代から古代・中世にかけての遺構が検出されている。全体として幅の狭い微高地上に位置しており、西半が弥生時代以前に形成された微高地、東半が古墳時代以降に形成された微高地と考えられた。東端は奈良時代以降と考えられる多くの柱穴が切りあって検出され、溝を挟んで西半は、縄文時代前期以前に形成されたと推定される微高地に、弥生時代後半の円形の住居址と、古墳時代前半と考えられる隅丸方形の住居址が検出された。住居址の下層からは二本の平行した流路をもつ溝が検出され、遅くとも弥生時代中期頃にはこの溝を埋めて住居址や、建物が作られていたことが明らかになった。ただし幼稚園園舎東端では近世に地下げのため、微高地の端部が削られ、水田が造成されていた。

また、そこから約60m南に位置する常盤小学校校舎増築に伴う発掘調査でも、5世紀を中心とした遺構が、近世の地下げによって削平されていたことが判明している。

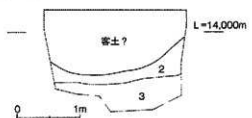
今回の試掘調査では、造成されたと考えられる客土の下層は、微高地と考えられる黄灰褐色土層～(淡)灰黄(褐)色土層～灰青褐色砂層の順で堆積していた。一番下層の砂層を基盤にして、幼稚園建設地よりやや遅れて微高地化したものと推定された。遺構は確認できなかった。(高橋)



第31図 調査地位位置図 (S=1/5,000)



第32図 トレンチ配置図 (S=1/400)



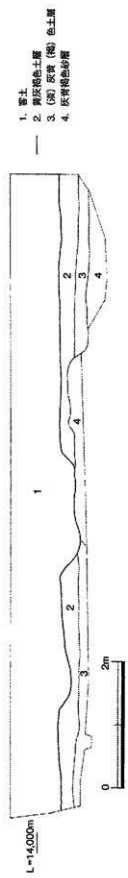
第34図 T-2断面図 (S=1/60)



第5図版 調査地遠景



第6図版 T-1断面



- 1. 客土
- 2. 黒野焼色土層
- 3. (50) 灰層 (60) 色土層
- 4. 灰野焼色砂層

第33図 T-1断面図 (S=1/60)

個人住宅建設に伴う立会調査

遺跡名 南溝手遺跡

所在地 総社市南溝手字仁左衛門253-2外

調査日 2011(平成23)年1月12日

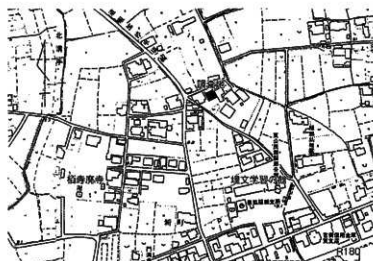
調査概要

調査地は総社市南溝手に所在する栢寺廃寺から北東へ約150m離れた集落に位置する。住宅の建て替えにより既在の家を解体し、新たに住宅が建設されることになった。

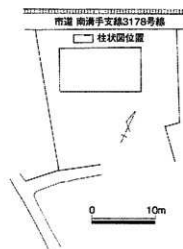
当地は南溝手と窪木遺跡が連続して営まれる微高地に立地していることから、浄化槽掘削時に立会調査を実施した。浄化槽設置箇所では、旧住宅に伴う石組井戸が検出され、著しく土地が改変されていた。しかし、井戸の掘形掘削が及んでいない北壁については、本来の基盤層(4層)を確認することができた。遺構は4層上面から柱穴を1基確認し、規模は径38cm、深さ40cmを測る。

調査の結果、当地は安定した微高地であり、南溝手遺跡のひろがりを確認することができた。

(松尾)

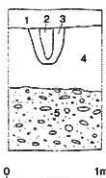


第35図 調査地位位置図 (S=1/5,000)



第36図 調査箇所位置図 (S=1/600)

西 東



1. 造成土
2. にぶい黄褐色粘質土 (10YR7/2)
3. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/2), 炭渣
4. にぶい黄褐色砂質土 (10YR5/4)
5. にぶい黄褐色砂礫土

第37図 土層柱状図 (S=1/40)



第7図 土層断面

集合住宅建設に伴う確認調査

遺跡名 真壁遺跡

所在地 総社市中央6丁目7-114

調査日 2011(平成23)年1月13日

調査概要

調査地は総社ふれあいセンターの南西へ約130m離れた造成地であり、東総社中原線に南面している。当地はすでに市街化されており、真壁遺跡として周知されているのみならず、宅地開発に伴う立会調査においても遺構が確認されている。

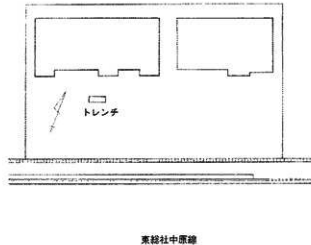
今回、造成地には集合住宅を2棟建設することになった。基礎工法は柱状改良と布基礎で、小規模な施工のため遺跡に与える影響は軽微であったが、周辺部で遺構が確認されていることから工事立会に合わせてトレンチを1本設定した。

層序は耕作土(1層)の下が中世から近世にかけての水田層(2~4層)であり、計3層を確認した。5層は褐灰色粘質土で粘性が強く、炭粒を含み層中から須恵器破片が出土した。土質からみて湿地状の堆積ではなく溝埋土の可能性が高い。

調査の結果、中近世の水田層より下層に遺構が存在することは確実であり、中央五丁目を中心に知られている真壁遺跡の広がりを確認することができた。(松尾)



第38図 調査地位置図 (S=1/10,000)

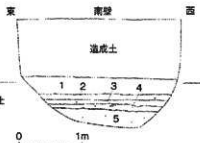


東総社中原線

0 10m

第39図 トレンチ位置図 (S=1/600)

1. 耕作土
2. 明黄褐色粘質土 (10YR7/6)
3. にぶい黄褐色砂質土 (10YR7/4)
4. 灰黄褐色粘質土 (10YR6/2)
5. 褐灰色粘質土 (10YR5/1)、溝埋土



第40図 土層断面図 (S=1/60)



第41図 出土遺物 (S=1/4)

特別養護老人ホーム建設に伴う試掘調査

所在地 総社市小寺字一本木958他

調査期間 2011(平成23)年3月3日

今回の試掘調査は、市内小寺地区で計画された社会福祉法人による特別養護老人ホーム建設に対応したもので、建設計画では施設は平成24年3月の開所を予定しているため、土地の取得が完了した段階で埋蔵文化財の有無について試掘調査を実施した。

建設予定地(第42図)は低い丘陵に扶まれた南東に開く緩やかな谷で、この谷のすぐ南側の東に張り出す丘陵先端では市道の拡幅に伴い平成7年度に古墳(兔登木21号墳)が調査された。また、周辺の南向きの緩斜面の全体に古墳や弥生期の集落遺跡の存在が予想されており、一帯は濃密な遺跡の分布地域である。

試掘調査は、建物の建設によって影響をうける約2100㎡を対象として7本のトレンチ(第43図)を設定し、重機を用いて掘り下げて土層断面で遺構の有無を確認した。

調査前の建設予定地は水田と資材置き場であったが、水田は谷水田特有の常時湿地状を呈する「ザブ田」であり、資材置き場は水田に土盛りをして利用されていた。

7本のトレンチの内、T-1～5は浅い谷の両側の斜面に相当するとみられ、水田層直下で緩やかな斜面堆積を示す淡灰～淡黄灰色の粘質土と、下層に粗い砂質土が堆積する状況が確認された。T-6・7は浅い谷の中心部に位置しており、粗い砂質土中に厚さ50cm程度の有機物がレンズ状に堆積した黒色粘土層を確認した。いずれのトレンチからも遺物・焼土・炭等の出土はなく、生活痕跡が全く認められない点から、この谷一帯には遺構が存在しないものと判断した。

(武田)



第42図 調査地位位置図 (S=1/4)



第43図 調査地トレンチ位置図 (S=1/2,500)

個人住宅建設に伴う立会調査

遺跡名 窪木遺跡

所在地 総社市窪木字前場661-1

調査日 2011（平成23）年3月23日

調査概要

調査地は岡山県立大学より南へ400m離れた窪木集落内に位置する。東側には長良山があり、山際は標高が低く窪木集落に向けて高くなり段状になる所も認められることから、遺構の存在が予想された。

今回の工事は水田を造成して個人住宅が建設され、敷地造成段階から立会調査を実施することにした。擁壁は敷地の北と西に設置され、現地観察したところ西壁は基礎がしっかりと安定した砂質土であったのに比べ北壁は砂層であった。そのため、西壁の断面調査を実施した。

層序は耕作土と床土（1層）以下に黄灰色粘質土（2層）があり、土器小片を含んでいた。2層下にはぶい黄橙色砂質土（4層）となり基盤層となる。この4層を掘り込んで土塙、小穴、堅穴住居と考えられる土層断面が確認でき、それぞれの埋土には土器細片や炭粒などが含まれていた。

調査の結果、窪木遺跡の現集落には集落遺跡が存在することが確実になった。

（松尾）



第44図 調査地位置図 (S=1/20,000)



第45図 調査箇所位置図 (S=1/500)



- | | |
|--------------------------------|------------------------------|
| 1. 褐色粘質土 (7.5YR6/6) 水田床土 | 7. 暗灰黄色砂質土 (2.5Y5/2) |
| 2. 黄灰色粘質土 (2.5Y4/1), マンガン・土器片含 | 8. 5と同じ |
| 3. 褐灰色粘質土 (10YR4/1), マンガン・土器片含 | 9. 黄灰色砂質土 (2.5Y5/1), 土器片含 |
| 4. ぶい黄褐色砂質土 (10YR5/3), 漆器層 | 10. 灰黄褐色砂質土 (10YR4/2), 土器片含 |
| 5. 灰黄褐色砂質土 (10YR5/1), 炭・土器片含 | 11. ぶい黄褐色砂質土 (10YR4/3), 住居埋土 |
| 6. 5と同じ | |

第46図 土層断面図 (S=1/120)

3. 発掘調査の概要

市道（南溝手3024号線）改良工事に伴う発掘調査（第2次・3次調査）

遺跡名 窪木遺跡

所在地 総社市南溝手262外

調査期間 第2次調査 2009（平成21）年10月8日～2010（平成22）年6月30日

第3次調査 2010（平成22）年9月1日～10月31日

本稿の2次調査については前年度の年報で概観を触れたが、遺構配置の詳細な検討と2010（平成22）年度の3次調査の結果を併せた窪木遺跡全体の調査成果について改めて触れたい。

今回の市道改良工事は、国道180号と平行に走る国道バイパスとをほぼ南北方向に連絡する道路（第48図）の拡幅改良工事として計画されたものである。このため、往時に総社平野を東に流れていた旧高梁川によって東西方向に細長く形成された微高地や旧河道を結果的に南北方向に横断する形で、長さ約250m、幅約10mのトレンチを設定して掘り下げる形となった。

また、地形と調査区の関係のみと、近接する国道180号バイパス建設に伴って実施された県教委による発掘調査では、路線が東西方向のため結果的に微高地と平行し縦断する形の調査区が多い点と対照的である。

第2次調査の1区（第48）では、南端から半ば近くまでと北端で礎層が露頭し遺構は非常に少ないが、その間の厚さ30～40cmが残存する砂質基盤層には弥生時代から中世の遺構が密集して検出された。中でも8世紀初頭と考えられる建物群は柱の掘り方が隅丸方形で大きく、今回の限定的な面積の調査区内で見ると同じ方位で規則的に配置され、中央の空間を囲んでいる等の官衙遺跡特有の建物配置を呈する。

2区（第48図）では、1区から用水路を挟んで続く礎層が調査区の南端から三分の一まで露頭しているが、その礎層を切って掘られた東西方向の幅約4m、深さ180cmの大溝が調査区の南端で検出された。この大溝（SD01）は調査区内で見るとその方位は1区の建物群と合致しており、土層断面と出土遺物からみると8世紀初頭に掘られ、10世紀後半に掘り直された後に埋没したことが明らかになった。また、底面や埋土に砂の堆積が認められないことから、常時滞水・通水する用水的な溝ではないと考えられる。

この大溝の性格としては、位置と方位を重視して掘削が困難な礎層を取って掘り込む必要性と機能していた時期、規模等を考慮すれば1区の建物群を囲む外郭溝であった可能性が高い。

2区は北半に向けて礎層が徐々に下降し微高地の砂質基盤層が北に向かって広がるが、まだ礎層が高く基盤層の薄い部分では地下水位の上昇が著しく、非常に脆い砂質基盤層となっているため遺構の検出は非常に難渋した。

この地形を反映し、良好な基盤層の2区北端から平成17年度に実施した1次調査区では、弥生～古墳時代の住居址が密集して存在することが確認されているが、対照的に2区の大半は礎層が粗く脆い砂質基盤層であることから古代の建物群のみが検出された。

2区では16棟の掘立柱建物で密集した状態で確認されたが、大半は高床式倉庫とみられる3間×5間～2間×4間の総柱建物で、総柱の倉庫としては小型に分類される規模のものである。これらの大半の建物は同じ方位で建てられている点特徴で、その配置から大別すると4群に分けられる。ただ、同時に存在したか否かは建物同士が近接し過ぎていることを考慮すれば、同じ建物群内で建て替えが

連続して3回程度行われたと考えるのが妥当であろう。

これらの掘立柱倉庫群の年代については、柱穴の検出過程で出土した須恵器杯Bと円面硯等から、1区の建物群や外郭大溝（SD01）と同時期の7世紀末葉～8世紀初頭と考えられる。

また、掘立柱建物の柱穴を切り廻治炉が付設されたSB04と東西方向のSD02は、倉庫群とは方位が異なり、溝からの出土遺物も後出の9世紀前半の所産とみられ、時期差が方位に現れている。

3区（第48図）は1区から現道を挟んで南に長さ80m、幅6mの調査区を設定したが、調査前の対象地は水田を埋め立てた小学校の校庭で、当時の施設の基礎部の撤去等の擾乱が著しい。

調査区は1区の南半で露頭した礫層が再び序々に下降し、良好な砂質の微高地が南に広がるとみられ、調査区内では礫層上に40～60cmの基盤層が遺存している。

発掘調査は重機で造成土を除去したが、近世の水田地上げ土中に弥生土器と須恵器がまぎれ込んで含まれており、調査区の南の国道180号線以南の微高地を地下げして運搬し埋め立てた可能性が高い。

中世の遺構は13世紀の南北方向の溝（SD03）が検出されたが、土層断面でみると一帯は水田として利用されていたとみられることから、検出された溝が『備中国賀陽郡服部郷図』に描かれた水田地割に関連する可能性も考えられる。

古代の遺構は、調査区の中程で中世水田層の下層から掘立柱建物5棟と、東西方向の幅約4.5m、深さ120cmの大溝（SD04）が検出された。この大溝と建物の方向は調査区内で見える限り1区の建物群や2区のSD01と同じとみられ、規模や埋土が類似している点からもSD04が現在の地割には全く痕跡を留めないが、1区の建物群の外郭溝の南辺である可能性は十分考えられる。

この外郭大溝は北辺（SD01）と南辺（SD04）間が直線で約150m離れており、この距離から建物群の外郭を一辺約150mの方形と考えられる。この場合、問題となるのが窟木遺跡の西側に近接し、建物群にやや先行して造営され、同時期に機能した稻寺廃寺との関係である。稻寺廃寺については塔基壇と外郭溝の一部の調査によりほぼ確定した寺域（第48図）の想定案が提示されているが、推定される寺域の方位は今回の建物群とは若干異なる。

今回の建物群の性格については、その規模と配置・出土遺物から官衙である可能性が高く、その場合、周辺の遺跡の在り方を併せて検討すると賀夜郡衙の一部と想定することが最も妥当性がある。しかしながら、今回の発掘調査は調査区の幅が6m前後に限定されたものであるため、正確な建物は配置・規模の把握の点では非常に不完全で隔靴搔痒の感は否めない。

総社市内に設置された下道郡、賀夜郡、窟屋郡の内、現在郡衙の所在地が明らかになっているのは窟屋郡衙のみである。窟屋郡衙と推定される三須河原遺跡では、規模の大きい建物の他に「郡殿」墨書須恵器、まとまった量の官衙遺跡特有の畿内系土師器が出土し、窟屋郡衙の一部と考えられている。

この三須河原遺跡もやはり三須廃寺の東側に隣接する位置にあり、8世紀初頭の藤原京期に造営され小型の総柱倉庫群を伴う点も窟木遺跡と共通している。

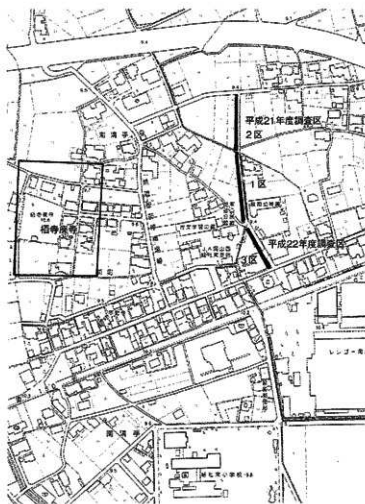
同様に郡衙と寺院が近接する事例としては、岡山県下で確認されたものでは美作国の久米廃寺と久米郡衙とみられる宮尾遺跡、備中国の英賀廃寺と英賀郡衙とみられる小殿遺跡の例がある。

律令体制成立期には在地の有力豪族が郡の大領に登用され、国府に先行して郡衙の整備と寺院の建立を督促することにより、律令国家と鎮護国家仏教の思想の普及を図ったと考えられている。

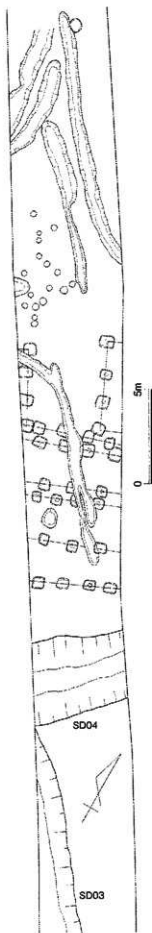
また、この在地政治勢力の起用が、各地で明らかになった郡衙遺跡の規模・内容の多様性の原因と考えられ、窟木遺跡の評価も既存の概念にとらわれない多角的な検討が必要であろう。（武田）



第47図 調査地位位置図 (S=1/50,000)



第48図 調査区位置図 (S=1/5,000)



第49図 3区遺構配置図 (S=1/200)

駅南区画整理事業に伴う発掘調査

遺跡名 三輪遺跡群

所在地 総社市三輪

調査期間 2010（平成22）年4月21日～ 2011（平成23）年3月8日

調査面積 約2,500㎡

調査概要

2010（平成22）年度の駅南区画整理事業に伴う発掘調査は、中断を挟みながら、区画道62号線3区、区画道19号線3区、区画道15号線の順で実施した。以下各調査区の概要を記す。

①区画道62号線3区

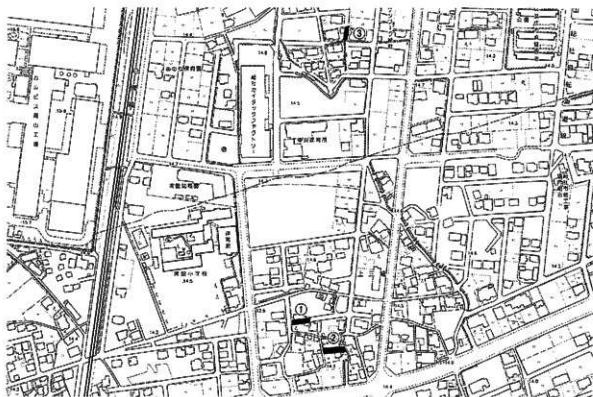
溝7・柱穴13・住居址2等が検出された。住居址はいずれも6世紀中葉から後葉にかけてのもので、このうち住居址—1は、約半分が検出されたが、四本柱と推定される方形の住居址で、6世紀第3四半期と考えられる須恵器が出土している。この住居址の下層からは、古墳時代前半の溝が検出されており、住居址—1が溝を埋めて造成されていたことが明らかになった。

住居址—2は、調査区東南角で壁体溝の一部が検出されたのみであるが、住居址—1と同じく6世紀後半のものとして推定される。

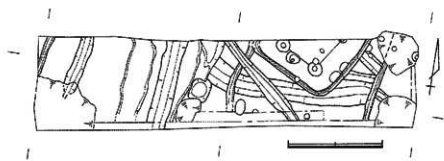
また、調査区の南端で、竈の煙道様の被熱した溝状の遺構があり、調査区南方に遺構が広がっていることが推定された。

②区画道19号線3区

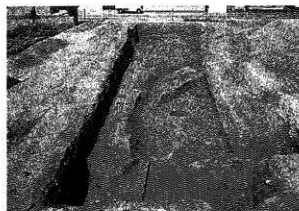
本調査地では、溝2が検出されたのみであるが、このうち、調査区西端に位置する溝—1からは、



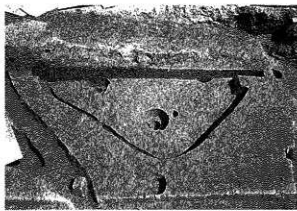
第50図 調査地位置図 (S=1/5,000)



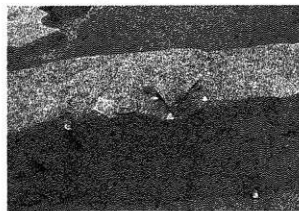
第51図 区画道62号線3区遺構配置図 (1/200)



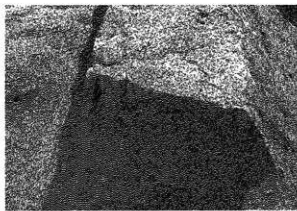
第8図版 区画道62号線3区遺構完掘状況
(東から)



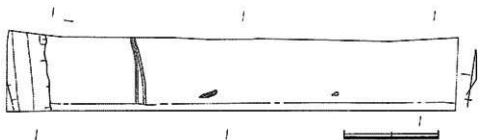
第9図版 区画道62号線3区住-1完掘状況
(南から)



第10図版 区画道62号線3区調査区南端竈煙道
検出状況 (北から)



第11図版 区画道62号線3区調査区南端竈煙道
完掘状況 (東から)



第52図 区画道19号線3区遺構配置図 (1/200)

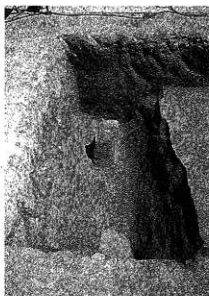
中世～近世頃と推定される木製の高杯が出土している。この溝-1内からは近世に属すると推定される土器片も出土しているので、遺構の造営時期としてはかなり新しく考えられる。

③区画道15号線

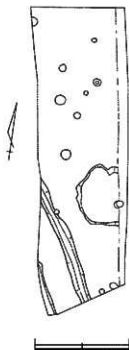
溝2・柱穴10・土壌1が検出された。いずれも弥生時代後半から古墳時代と考えられる。このうち土壌からは、弥生時代中期の高坏と壺の底部が出土している。 (高橋)



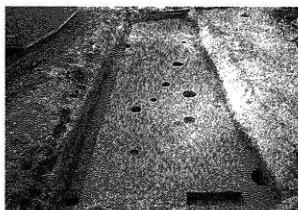
第12図版 区画道19号線3区
溝完掘状況 (南から)



第13図版 区画道19号線3区
遺構完掘状況 (西から)



第53図 区画道15号線遺構配置図 (1/200)



第14図版 区画道15号線遺構完掘状況 (北から)



第15図版 区画道15号線遺物出土状況

商業店舗建設に伴う発掘調査

遺跡名 井尻野西川遺跡

所在地 総社市井尻野字川田340-1外

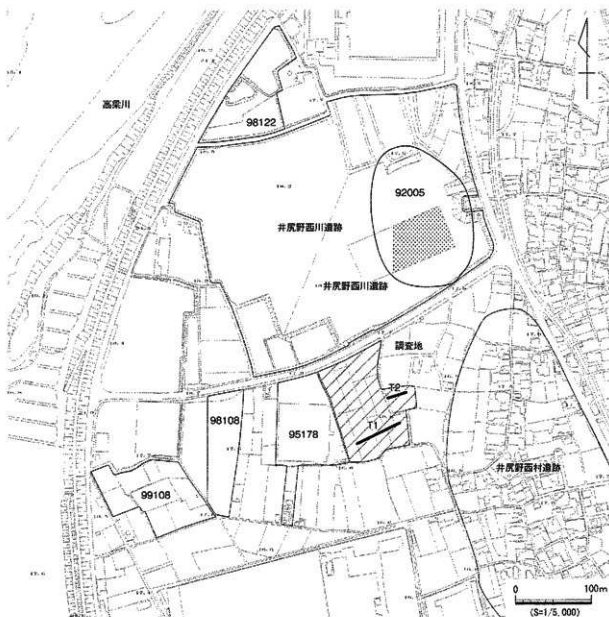
調査期間 2010（平成22）年4月5～7日（試掘調査），8月16～24日（発掘調査）

調査面積 約160㎡

調査概要

北側に井尻野西川遺跡，東側に井尻野西村遺跡が近接している調査地において，商業店舗の建設が計画された。

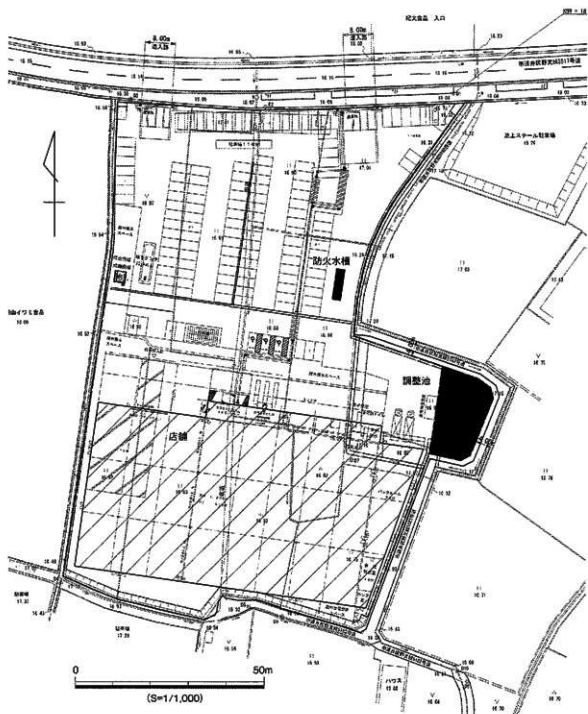
井尻野西川遺跡では，平成4年度に食品工場の建設にともなって発掘調査が実施され，近世を中心とする水田遺構の存在が確認されている⁴¹。また，平成7年度には調査地の西隣でも試掘調査が実施



第54図 調査地位置図 (S=1/5,000)

され、ここでは遺跡が存在していないことが確認されている¹²⁾。

この結果をふまえ、今回の調査地をみてみると、井尻野西村遺跡は微高地の上に分布している遺跡であり、調査地の一段低くなった水田地帯とは対照的である。調査地と同じような立地条件にあるのは井尻野西川遺跡である。しかも、検出された水田遺構にともなう水路は、現況の水路とほぼ同じ位置に検出されており、この現況水路が調査地の東側部分を南流していることから推測して、調査地にも井尻野西川遺跡が広がっている可能性が高いものと判断した。



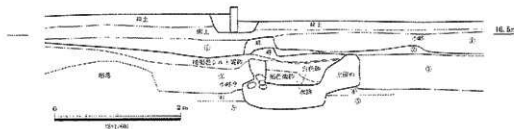
第55図 店舗配置図 (S=1/1,000)

そこで、事業の実施にあたっては、試掘調査を実施して、遺跡が広がっているかどうか確認する必要があり、その調査は掘削のともなう建物範囲と調整池を中心に行う必要があるものと判断した。

試掘調査は、重機を用いて、建物位置に東西方向の長いトレンチ1を設定した。しかし、東端部分では市道と水路の付替え工事が行われていたことからトレンチを延長することができず、北側に新たにトレンチ2を設定した。

その結果、敷地の東側部分で予測どおり、水路と畔、小畔が検出された。

基本的な土層は、約20cmの現代耕土・床土の下に、30cm程度の①褐色細砂層（5cm以下の円礫含む）、約5cmの②褐色～橙褐色シルト層（旧耕作土）、約50～60cmの③褐色細砂層、約20cmの④淡赤橙褐色シルト混じり砂層、そして50cm以上の⑤褐色土層である。



第56図 トレンチ1土層断面図 (S=1/60)

現況の水路は、トレンチ1の北側で東に短く鍵の手に折れている。しかし、トレンチ1で検出した水路は、その現況水路を南に延長した位置にあることから、ある時点の洪水により埋没したままここでは復旧されなかったものと判断される。

畦は水路の埋没後に同じ位置で2枚、小畦は水路の埋没前と、埋没後の②と④層の盛り上がりとして検出された。

出土した遺物は、④層の検出中に肥前磁器が2点、水路を構築するため水路より一回り大きく掘削して水漏れを防止する土留め盛土中から備前焼と燧瓦が各1点である。トレンチ2は、建物の東北部分に設定した。

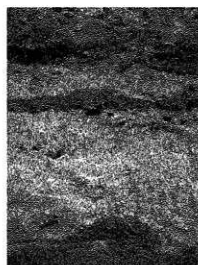
基本土層はトレンチ1と同様であるが、トレンチの西端では①層の洪水砂が円礫層となっていた。遺構は、小畔のみが検出された。

小畔は、②層と④層の上面で検出されている。②層では14条、高さが6～15cmで、その間隔は0.6m前後の狭い距離も認められるが、1.3～1.4m前後の距離が多く、全体の平均では1.2mとなる。④層では8条、高さ6～15cm、幅は1.8～2.0mとばらつきがなく、平均で1.87mである。

遺物は、出土していない。



第16図版 トレンチ1 水路



第17図版 トレンチ2 小畦

試掘調査の結果、2面の耕作面が形成されており、いずれも洪水砂により埋没していることが確認された。

とくにトレンチ2の小畦では、上面と下面でその方向が踏襲されているものの、その位置と間隔では大きなズレが認められた。

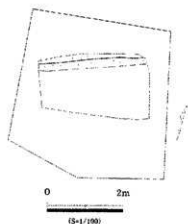
発掘調査は、埋蔵文化財に関する覚書に基づく協議の結果、遺構の消滅する調整池と防火水槽に対して実施することとし、調査期間は8月16日から8月30日までとした。建物の基礎工事にともなう掘削については小規模であることから立会調査の予定とした。

試掘調査で遺構面を2面確認しているが、上面の遺構面は明治時代の洪水により埋没したものと推測されたことから、下面の遺構面のみを調査の対象とした。

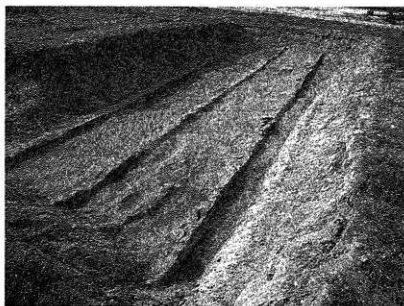
検出された遺構は、防火水槽の調査区で小畦が1列、調整池の調査区で小畦が3列である。

防火水槽の小畦は、東西方向で、N-107.8° -W。断面は三角形で、下面の幅は約40cm、高さ6cm～9cmを測る。

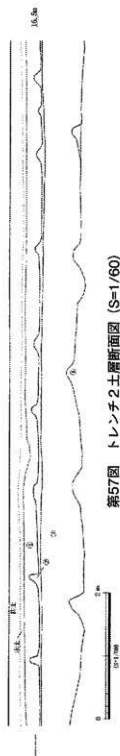
調整池で検出された3列の小畦は、いずれも同一の方向に並列している。南北方向で、N-8.7°～9.7° -W。各畦間の距離は1.87m～1.98mを測る。小畦の幅は、



第58図 防火水槽部分の遺構配置図 (S=1/100)



第18図版 小畦の検出状況 (南東から)



第57図 トレンチ2土層断面図 (S=1/60)

基本形が上面で20cm、下面で40cm、高さ4cm～13cmを測る。しかし、崩れている箇所では下面幅50cmを越えている。断面は、台形を基本とするが、小畦の東側はほぼ直立、西側は緩やかな傾斜を呈する、非対称形となっている。

小畦は、茶褐色シルト系で築かれており、良好に残っている小畦では2ないし3回の盛り上げが認められる。

これら小畦群は、洪水による円礫を多く含んだ砂により埋没する。その厚さ60cm前後を測る。

この洪水砂の中にはわずかであるが陶磁器と木炭が検出された。肥前の磁器と、唐津系の陶器である。

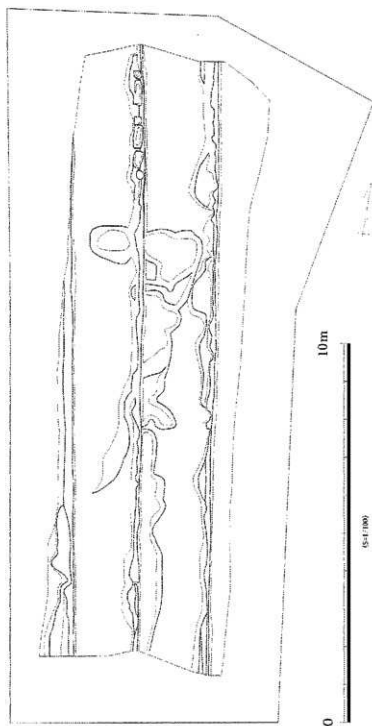
調査の結果、調整池では小畦3条を南北方向で長さ16mにわたって検出した。各畦の間隔は1.9m前後である。対して、防火水槽での小畦は東西方向である。

現況水路の下にあると推測される旧水路、その西側が東西方向、東側が南北方向になるものと考えられるが、平成4年度の調査例からはその傾向を認めることができない。

出土した遺物から、小畦を埋没させている洪水砂は18世紀代のもとなり、試掘調査で「延享2年(1745年)」の埋没と推定したことを裏付ける結果となった。

井原野西川遺跡は、今回の試掘調査と発掘調査によって、上面と下面の2面の遺構面が形成されていたことが確認された。いずれも小畦が検出されており、耕作地とした生産遺跡である。

下面の耕作面は、調整池調査区の洪水砂出土の遺物と、試掘トレンチ1の③層検出中より出土した

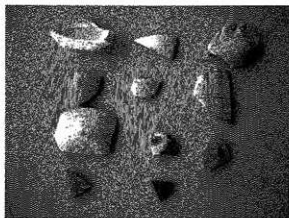


第59図 調整池部分の遺構配置図 (S=1/100)

遺物から近世中期～後期に洪水あるいは耕作によって埋没したもので、③層の洪水砂が『灌井十二箇郷用水史』^{註1}に記載される「延享2年（1745年）6月4日の大洪水で井尻野村の堤防が決壊し、田畑が荒所となった」ものに該当するものと考えられる。

上面の耕作面は、試掘トレンチ1の③層の洪水砂に水路を設置することで再耕作地化したもので、水路の土留め盛土中から出土した遺物から近世末～近代前半に築かれたものと考えられる。『灌井十二箇郷用水史』に記載される「延享2年の洪水で荒所となった田畑を嘉永4年（1851年）に起こし返し」のそれに該当するものか。そしてこの水路もまた洪水により埋没する。埋没した水路の上には、新たに2度の畔が置かれており、溝の再掘削はなされなかった。現在の水路のように鎌の手状に迂回されたのであろう。おそらく埋没水路の東西にあった耕作地をまとめたことに起因する。

この上面の耕作面を埋没させた試掘トレンチ1の①砂層は、明治13年7月1日か明治26年10月14日の洪水によるものである可能性が高い。



第19図版 出土遺物

(前角和夫)

註1 「紀文食品工場建設に伴う発掘調査」(『総社市埋蔵文化財調査年報3』1994年)

註2 「工場建設に伴う確認調査」(『総社市埋蔵文化財調査年報6』1996年)

註3 『灌井十二箇郷用水史』灌井十二箇郷組合 1976年

地上デジタルテレビ放送設備建設に伴う発掘調査

遺跡名 伊与部山遺跡

所在地 総社市下原字伊与部山694番地6外

調査期間 2010（平成22）年7月12日～7月17日、11月27日（立会）

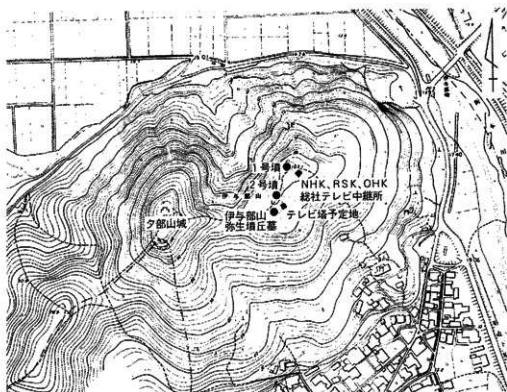
調査面積 11.7㎡

調査概要

アナログ放送から地上デジタル放送への移行は、受信側と送信側の両方に対応するものであり、後者では各地の中継放送所の整備も必要となっている。

総社市下原の伊与部山山頂にある総社中継局もデジタル化に備えて、検討が進められた。新たに用地を取得して新設するか、既存の施設を改修するか、いずれにせよ伊与部山山頂は伊与部山弥生墳丘墓・伊与部山古墳群・伊与部山遺跡の分布範囲内であることから、事前の協議が行われた。新設の場合は発掘調査等の期間や経費が、改修にくらべて大きくなることや、デジタルへの移行期間が限られていることなどから、最終案は既存施設内で実施することとなった。

既存施設を設置した昭和60年にはすでに、発掘調査が実施されており、その時に地形改変を受けていない部分に対して新たに設置される設備の範囲と、施設の改変にともなう出入口の高低差を解消するためのスロープ設置範囲、この2つが今回の発掘調査対象である。



第60図 調査地位置図 (S=1/5,000)

調査は、埋蔵文化財に関する覚書に基づく協議の結果、7月12日から7月18日までの発掘調査期間で開始し、工事施工後の植栽にともなう掘削については立会調査とした。

調査区は2ヶ所で、新規施設の設置にともなう掘削範囲をA区、スロープの掘削範囲をB区とした。

また、施設改修工事が終了し、作業道とした伐採範囲内において実施される植栽。当初、50本が予定されていたが、遊歩道として活用するため5本に変更され、11月27日に立会調査を行なった。

調査地は、昭和41年に伊与部山墳墓群発掘調査団による調査が実施された伊与部山弥生墳丘墓の立地する尾根丘陵部から南東側に位置し、高低差では5mほど下った標高96m付近の傾斜地になる。この間の傾斜度は約12度を測る。

昭和60年の発掘調査で検出された遺構は、第61図の土塚墓・溝状遺構・住居状の落ち込み・土器棺である。

A区は、敷地内の南端に旧状地形のまま残されていた約5mが調査対象となる。調査区が狭すぎたこと、斜面地であることからそれほどの土層堆積があるものとは予測しておらず、地山までの深さを確認することを省いて重機掘削を開始し、表土とその下の堆積土を15cmほど除去した時点で遺構の検出等の精査を行った。しかしこの面以下の土層と除去した堆積土にはほとんど違いがないと判断されたため、部分的な深掘りを手掘りで行ったところ、旧表土と判断できる土層がその下に検出された。このことから表土の下にあった堆積土は昭和60年の工事にともなう余分となった土砂を積み上げたものと判断された。

そこで再度、重機によって旧表土とその下層の黄褐色砂質土となる斜面崩落土を除去し、地山面での遺構検出を行った。

その結果、溝状遺構と土坑が検出され、地山面の傾斜変換点も確認できた。

溝は、東西方向で幅25cm、深さ8cmを測る。

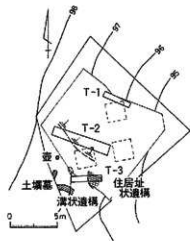
土坑は63cm×33cmの楕円形で、深さ24cmを測る。

出土した遺物は、旧表土より上の前回の工事排土と、旧表土より下の斜面崩落土からわずかの土器片が検出された。いずれも弥生土器の小片である。

B区でも、A区同様に、地山面での遺構検出を行った。

その結果、土坑・小穴・段状遺構・溝状遺構が検出された。

土坑は、90cm×50cmの長方形で、深さ9cmのもの、北側断面で検出され



第61図 1985(昭和60)年調査の遺構配置図 (S=1/400)



第20図版 A区遺構検出状況

た長さ120cmで、深さ24cmの2段に窪むもの、東側断面で検出された70cm、深さ27cmのものである。

小穴は、直径30cm前後で深さ8cmのもの、20cm前後で深さ13cmのものがある。

段状遺構は、平坦面となる部分の幅が20～30cmのものが上下2段に検出され、直径50cm前後の深さ10cm以内の円形の窪みがともなっている。

溝状遺構は、幅30cm、深さ2cmを測る。

出土した遺物は、表土からあまり深くない崩落土層の上位で検出されたものと、やや深い位置で検出されたものがあるが、いずれもそのほとんどは単独の出土でまとまって出土したものがなく、しかも小片である。

その中で形の判明するものは、弥生土器の高杯・壺がある。

調査の結果、溝状遺構・土坑・小穴・段状遺構が検出された。



第21図版 B区遺構検出状況

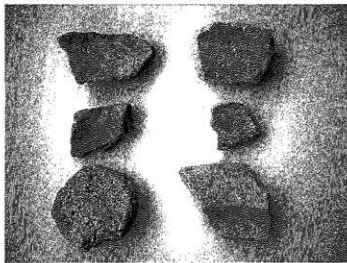
溝状遺構は、A区西側の標高96mのラインが南東に少し張り出している箇所の張り出しに沿って北西から南東方向に検出されている。この溝の底の高さは一定しておらず、10cm以上もの差があり、かつ露岩も認められるなど、明確な溝として掘削したものとの判断はできなかった。しかし、昭和60年調査時の溝状遺構とつながるようにもみられるので、A区の北側で山側に入り込んでいる平坦面の山側からの出水を処理する溝であった可能性も考えられる。

土坑は、B区で多く検出されたが、明確な遺構として取り上げられるものは少なく、その多くは風倒木などにもなるものではないだろうか。その中でB区の東端で検出された径70cmの土坑は昭和60年調査時の土城墓とつながる可能性が高い。

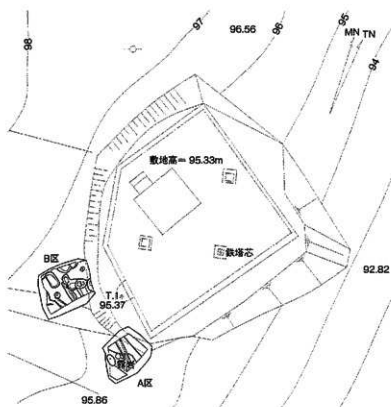
小穴は、B区で2ヶ所を検出したが、土坑同様に風倒木の可能性が高い。

段状遺構も、調査区が狭いため明確に捉えることはできなかった。

出土した遺物は、A・B区ともにわずかであり、遺構にもなるものも皆無である。その出土状況から考えて、先の工事における造成土（再堆積土）に混入したものと、上方の弥生墳丘墓から転落したことによる流れ込みの混入と推測される。



第22図版 出土遺物



第62図 遺構配置図 (S=1/250)

4. 史跡整備事業の概要

2010（平成22）年度 鬼城山環境整備事業

1 事業経過

2001（平成13）年3月に策定した「史跡鬼城山環境整備基本計画」に基づき、復元地区と位置づけられた角楼から第0水門までの整備の最終年である。

2001（平成13）年度の高石垣修復にはじまり、2003（平成15）年度には西門復元、2005（平成17）年度にはガイダンス施設建設、2006（平成18）年度に北門表示整備を行い、2007（平成19）年度から再び土塁修復復元を再開した。

2 2010（平成22）年度整備事業概要

(1) 土塁復元

復元土塁を高石垣から西門側に3m(74.8m)を版築盛土とした。今回は基本的に土による版築とし、長年の風化で劣化した土の補強として白セメントを3%付加し使用した。土塁の復元は本年度で終了となる。

土塁復元に伴い土塁内側列石を設置した。

(2) 板塼表示

土塁整備の完成に伴い未設置であった高さ3mの板塼2間分を設置した。この部分は板塼復元高さの部分である。

(3) 敷石、園路整備

前年度で整地し、シート等で保護していた城内部分の敷石と城内側について敷石目地つめ、マサ土舗装を実施した。また、角楼から山頂までの園路をカラー舗装で行い、土塁部分を色分けすることで位置表示をおこなった。

(4) 整備報告書の刊行

平成13年度から実施していた復元整備が平成22年度で終了するにあわせて、10年間の整備状況をまとめた。

2010（平成22）年度事業経過

2010（平成22）年4月1日（木）	補助金交付決定通知（21庁財第424号）	
	補助対象経費	46,000,000円
2010（平成22）年5月26日（木）	第33回 鬼城山整備委員会	
8月11日（水）	実施設計契約	2,047,500円
10月20日（水）	史跡鬼城山環境整備工事契約（土塁・列石・板塼）	41,357,400円
10月25日（月）	監理監督業務契約	1,338,750円
12月7日（火）	鬼城山環境整備事業報告書印刷契約	896,700円
12月21日（火）	第34回鬼城山整備委員会	
2011（平成23）年3月31日（木）	竣工	

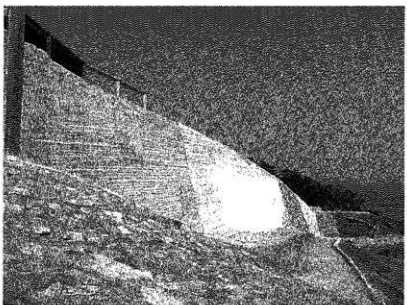
(谷山雅彦)



第23図版 園路整備



第24図版 板塀・敷石整備



第25図版 土塁完成

5. 付 載

一丁塚古墳群の測量調査

遺跡名 一丁塚古墳群

所在地 総社市秦正木山4000-1外

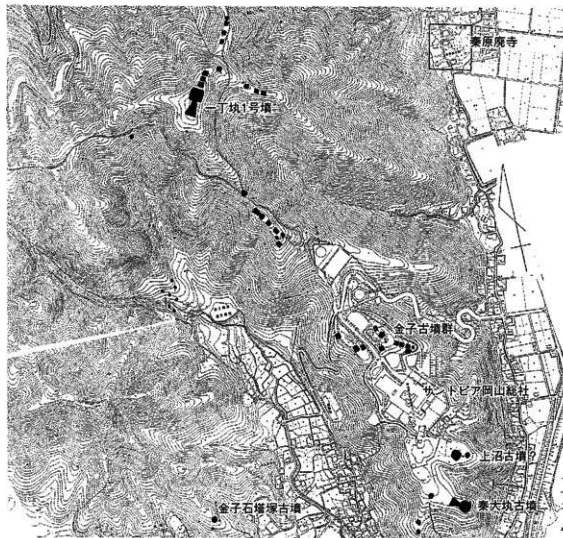
調査期間 2011(平成23)年3月

今回の測量調査の対象となった一丁塚古墳群は高梁川右岸域の総社市秦に所在し、吉備高原南端の標高381mの正木山から南に派生し、眼下に高梁川を望む標高189m~120mの急峻な尾根上に十数基の古墳が築かれている。

まず、秦地区の歴史的環境を概観すると、一丁塚古墳群が所在する尾根上には、この他に南に約1.4kmに渡り、標高70m付近まで下降しながら延びる尾根稜線上に連なる形で多数の古墳が所在することが確認されている。

現時点では秦大塚古墳(全長56m, 前方後円墳)、秦上沼古墳(規模・墳形不明, 三角縁神獣鏡出土)、金子古墳群(方墳11基)が確認されている(第53図)が、金子古墳群の密集度合いや地元住民の話から推定すればこの他に未確認若しくは消滅した小規模墳が多数存在した可能性が十分考えられる。

また、この尾根の西側の狭い谷には十数基の横穴式石室墳が存在し、西側の尾根先端付近に所在す



第63図 一丁塚古墳群位置図 (S=1/10,000)

る金子石塔塚古墳は、直径20～25mの円墳で、全長約9mの横穴式石室には井原市産の貝殻石灰岩製の家形石棺が安置されていることで著名である。このことから、金子石塔塚古墳は同様の石棺を使用する三須丘陵のこもり塚古墳（全長100m、前方後円墳）、江崎古墳（全長45m、前方後円墳）の被葬者に次ぐ位置にあり、古墳時代後期の新本川流域の盟主墳と考えられている。

律令期の秦地区は下道郡秦原郷に比定されており、一丁塚古墳群から約700m下方の裾部に所在する秦原廃寺は地方寺院としては稀有な飛鳥期創建の寺院である。出土した軒丸瓦が京都市の広隆寺出土のものに近似する点と「秦原」の地名から、その建立にあたっては帰化人系氏族である秦氏との関係の可能性が先学により考えられてきた。

このように秦地区の古墳時代～飛鳥期の遺跡の在り方は、総社平野全体でみれば非常に特異な様相と集中度合いを示し、連絡と築造された首長墓から寺院への変遷とその歴史的背景・政治的系譜を同じ地区で追認できる稀有な例といえる。

今回の確認調査の対象となった一丁塚古墳群の発見の契機となったのは、秦地区で2009（平成21）年度より施行された県営植林事業である。秦地区の山林では、以前から松くい虫による松の枯死が著しく、備中県民局では2009（平成21）年10月から約7haを対象として保安林でもある山林の保全のため、枯死した松を伐採した後植林を行う事業に着手した。

対象となった約7haの山林には2003（平成15）年度に岡山県教育委員会が発行した「岡山県遺跡地図」に記載された遺跡は無く、事業対象地の約400m北に記載されている山根古墳（前方後円墳？）と「サントピア岡山総社」の敷地内で確認された金子古墳群との間には古墳は確認されていなかった。

しかし、1936（昭和11）年に編集された『吉備郡史』には「(旧) 秦村妙見奥の正木山東邊昇立部の最高峰に7基の古墳が存在し、頂上に龍王大権現等の3基の石塔が立つ5（号墳）・（一丁塚1号墳後方部）が秦村で最大の円丘である」と記されている。これらのことから、地元では山頂に石塔が建つ「塚」を古くから「一丁塚」と呼称していたとみられ、尾根に点在する石仏と共に信仰の対象となっていた。

一方、植林事業は2010（平成22）年2月に植林を終了したが、その後、2011（平成23）年8月に金子古墳群周辺で計画された開発の事前踏査で現地周辺を訪れた文化課職員が、伐採された尾根頂部に古墳の存在を確認した。

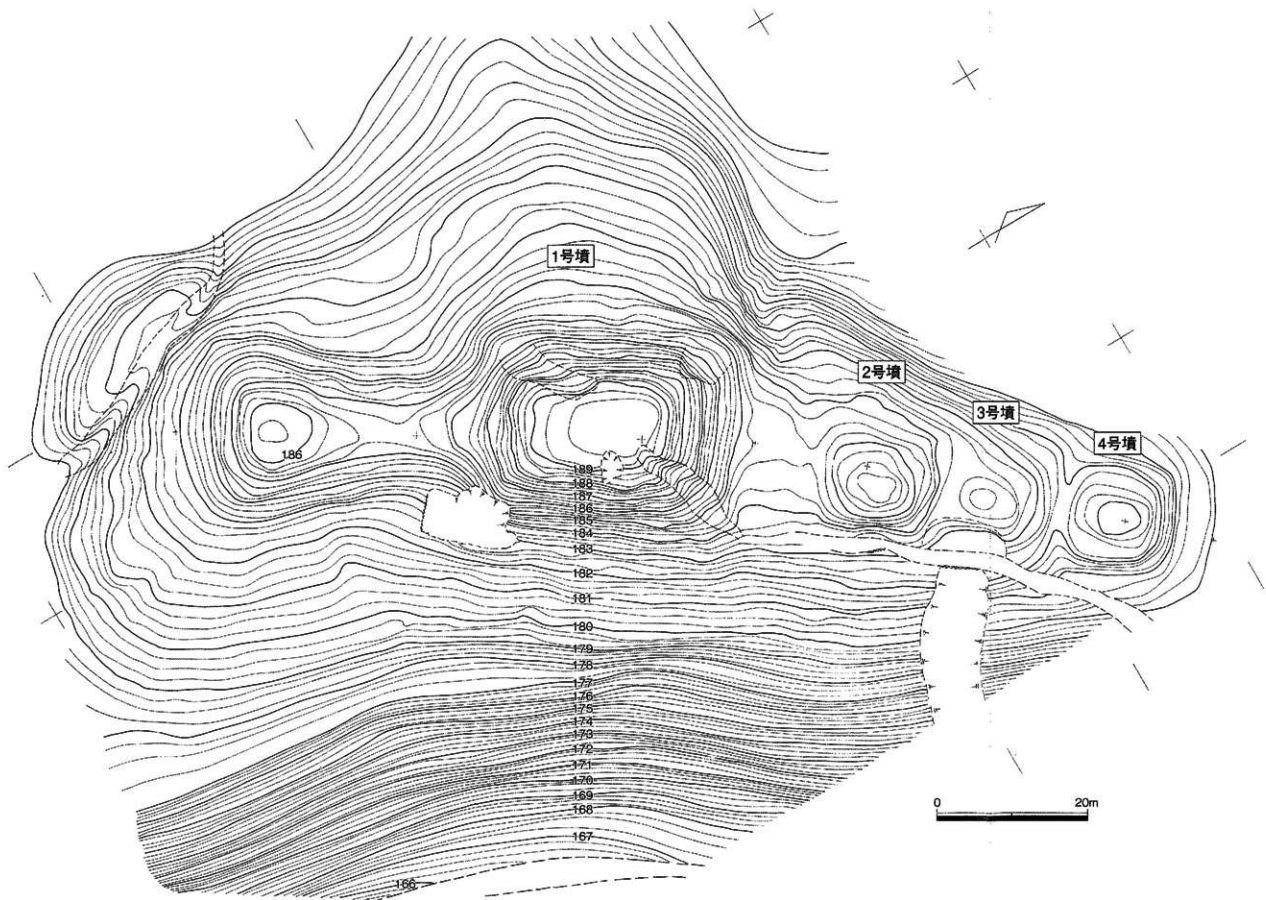
この時点で墳丘上には植林がなされており、残存する立ち木や随所に段状に集められた伐採木のため正確な規模・形状は把握できなかったが、全長70m以上の前方後方墳（一丁塚1号墳）である可能性が想定された他、『吉備郡史』に記載された1号墳の北側に連なる4基の古墳も確認した。

このことを受け、教育委員会では一丁塚1号墳が70mを超える前方後方墳であった場合に県南部で最大規模になり、その形状から古墳時代前期の所産である可能性も考慮し、まず正確な測量図の作成のための調査を行うこととした。

測量調査は樹木の落葉や天候を考慮し、1号墳～4号墳を対象として2011（平成23）年3月12日～25日に行ったが、前述のように随所に伐採木が集積されており、古墳の規模・形状を正確に把握することが非常に難しく、後日に集積を除去することを前提として止む終えず推測で数値を算出した部分も多い。

測量調査の結果、1号墳は前方部長約39m、高さ6m、後方部長約36m高さ3m、全長約75mの前方後円墳（第64図）であることが判明した。また石塔が建つ後方に主体部が存在するとみられ、石塔に転用された3枚以上の竪穴式石室の蓋石と玉砂利の散布が確認された。

この他、2号墳は一辺約15m、3号墳は一辺約12m、4号墳は一辺約15mの何れも方墳であるが、2号から4号へ墳丘高が高くなる点から考えて同時期の所産ではなく、时期的な変遷の可能性がある。



第64图 一丁块1~4号墳測量图 (S=1/500)

山手地区果樹園採集の玉類について

所在地 総社市宿947-1外

旧山手村宿の旧集落東南部に位置する丘陵上には果樹園が多く林立する。その中の大正池と前池に扶まれた丘陵上の果樹園から玉類を採集しているとの連絡を受けた。果樹園を営まれている黒江弘一郎氏・登志子氏御夫妻がこれまでに採集されたもので、早速黒江さん宅に赴き、遺物を実見させていただいた。玉類は古墳から出土したものとわれ、採集された丘陵にはかつて多くの古墳が存在していたものと推定された。

実見させていただいた玉類の中に、類例のない透明ガラス製の切子玉状をした玉が出土していたことから、公表する必要を感じ、借用をお願いしたところ快く応じてくださった。

なお、採集場所に足を運んだが、すでに果樹園で造成され、古墳らしき高まりは確認できなかった。

玉類(第25図版)は、水晶製の勾玉1点、切子玉1点、ソロバン玉状品1点²¹、碧玉製の管玉1点、ガラス製の切子玉状品8点、ガラス小玉54点の合計66点である。

1は無色透明の良質な水晶製の勾玉で、いわゆる「コの字」状を呈している。表面の研磨は比較的丁寧であるが、整形の際についた敲打痕が残っている。この敲打痕は、水晶製玉類の整形工程に特徴的に認められるもので、研磨工程以前に敲打調整が施される。この調整は、水晶製玉類の種類・生産時期にかかわらず認められるため、水晶加工に適した技術であるとともに、完成された水晶加工技術



第65図 採集地位置図

の導入の可能性が高いことが推定される^{註1}。穿孔は片面穿孔で、孔末には穿孔の最終工程で刺突によって貫通させたために生じたと考えられる割れ円錐が認められる。2は濃暗緑色硬質の碧玉製で、直径約9mm、長さ2.3cmを測る。表面の研磨は丁寧で、よくツヤ出しされていてキズ等も残されていない。片面穿孔で、孔末は刺突によって生じた割れ円錐が小さめに残っているが、その内面も研磨が施されているため、円滑に仕上げられている。特筆すべきは、孔の明け始めも少し窪んでから孔になっており、穿孔し始めの錐ブレを止めるための下孔の可能性もある。3は無色透明の良質な水晶製の切子玉。小口面には、整形の際の敲打痕が残されているが、切子面は丁寧に研磨が施されており、稜線も比較的シャープに作り出されている。穿孔は片面穿孔で、孔末には、やや大きめの割れ円錐が認められる。4は無色透明の水晶製のソロバン玉状品。研磨は丁寧であるが、小口面には整形の際につけられた敲打痕が残る。稜線はやや甘いながらもしっかりと作られている。穿孔は片面穿孔で、孔末に割れ円錐がやや大きめに残っている。

勾玉はやや「コ」字状を呈していること、碧玉製管玉は、径約1cm×長3cmの規格的な濃緑色硬質の碧玉製であること、また1～4の孔は、いずれも片面穿孔され、孔末には割れ円錐が認められる。これらのことから、この4点の石製玉類は、島根県松江市玉湯町周辺に存在する出雲玉造遺跡で作製されたものと推定される。

ガラス製切子玉状品(第26図版右端)の色調は、半透明～淡緑色であり、ロッド技法による巻き付けで整形されている。製作工程は、①剥離剤を塗った鉄芯に融解させた半透明～淡緑色のガラス生地を巻き付ける。②加熱しながら中腰みに整形し、小さめの鉄製コテのような工具で表面を押さえて切子面様の平坦面を作っていく。③加熱を終え、形が変わらない程度に冷却したら、灰等の保温材の中に入れて徐冷(徐々に冷却していくこと)したのち鉄芯をはずして完成、が復元できる。切子面は、加熱しながらの押圧整形によって加工されており、研削によって加工されていないので厳密には切子面とは呼べない。透明に近いガラスが使用されていることや、風化がほとんど認められないこと、古墳等の出土品としての類例が管見の限りないことから、製作時期は不明といわざるを得ない。

ガラス小玉は、弥生時代～古墳時代を通じて認められるが、基本的には輸入品と考えられる。色調・形状によって日本への流入時期が異なっていると考えられるが、ガラス小玉のみからは時期を特定しきれない。色調と法量の分布を表に示すとおり、大型の瑠璃色小玉と、小型の淡青色・半透明淡青色・やや濃緑色・青色・黄色・緑色・淡青緑色の二群に分かれる。54は、やや濃緑色の径約2～3mmの小さな玉であるが、表面に斑点状の黄色のガラスが張り付いているが、意図的にトンボ玉を製作しているとは考えられない。

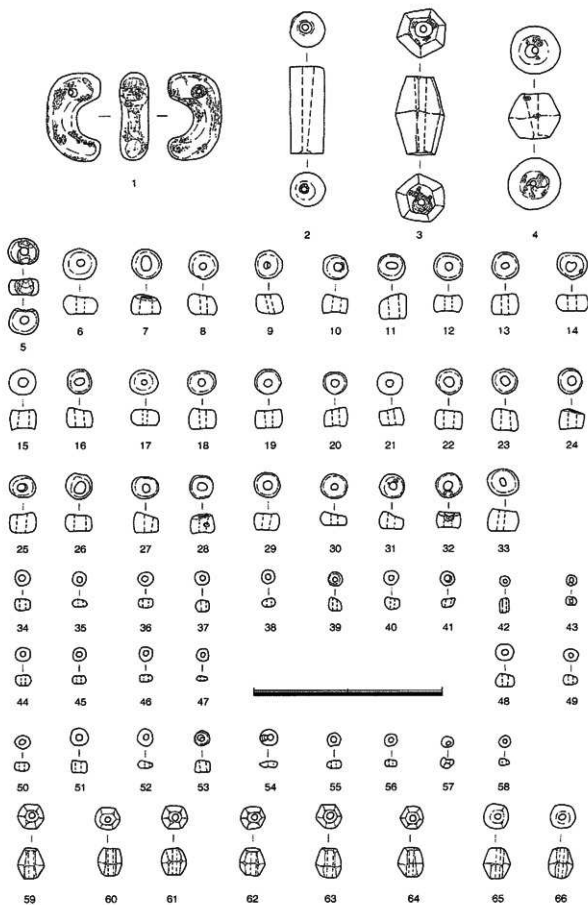
以上のように、今回の採集された玉類は、おそらく6世紀後半に築造された古墳が破壊され、副葬されていた玉類が採集されたものと考えられる。

最後になりましたが、公表の機会を与えてくださった黒江弘一郎氏・登志子氏御夫妻に、記して感謝の意を表します。

(高橋)

註1 ソロバン玉と呼称されることが多いが、ソロバンの玉に形状は似るものの無関係であることから、ここではソロバン玉状品と呼ぶ。

註2 高橋進一「水晶製玉類の製作について—磨削整形技法を中心として」『環瀬戸内の考古学—平井勝氏追悼論文集—』2002



第66圖 玉類實測圖



第26図版 採集された玉類

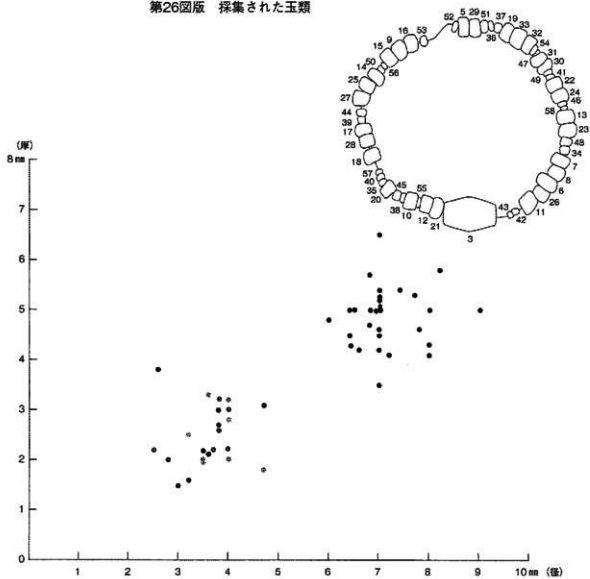


表4 ガラス小玉の色調・質量分布表

報 告 書 抄 録

ふりがな	そうじゃしまいぞうぶんかざいちょうさねんぼう
書名	総社市埋蔵文化財調査年報21
副書名	
巻次	
シリーズ名	総社市埋蔵文化財調査年報
シリーズ番号	21
編著者名	谷山雅彦, 平井典子, 武田恭彰, 前角和夫, 高橋進一, 松尾洋平
編集機関	総社市教育委員会
所在地	〒719-1192 総社市中央一丁目1番1号 TEL.0866-92-8363
発行年月日	2012 (平成24) 年3月30日

総社市埋蔵文化財調査年報 21

平成24(2012)年3月27日印刷
平成24(2012)年3月30日発行

編集発行 総社市教育委員会
岡山県総社市中央一丁目1番1号

印刷 サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2

